

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成30年6月29日
【事業年度】	第21期（自平成29年4月1日至平成30年3月31日）
【会社名】	株式会社アドバンスト・メディア
【英訳名】	Advanced Media, Inc.
【代表者の役職氏名】	代表取締役会長兼社長 鈴木 清幸
【本店の所在の場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番4号
【電話番号】	03 - 5958 - 1031（代表）
【事務連絡者氏名】	常務取締役経営管理本部長 立松 克己
【最寄りの連絡場所】	東京都豊島区東池袋三丁目1番4号
【電話番号】	03 - 5958 - 1031（代表）
【事務連絡者氏名】	常務取締役経営管理本部長 立松 克己
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号）

第一部【企業情報】

第1【企業の概況】

1【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第17期	第18期	第19期	第20期	第21期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
売上高 (千円)	1,566,593	1,822,747	2,291,212	2,581,028	3,683,329
経常利益又は経常損失 () (千円)	33,506	169,512	297,793	118,588	610,562
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失 () (千円)	243,764	176,591	175,645	103,238	522,259
包括利益 (千円)	187,145	36,391	420,506	110,966	545,599
純資産額 (千円)	5,279,067	5,249,642	5,049,152	4,966,555	5,504,374
総資産額 (千円)	6,363,015	6,552,864	6,277,980	6,206,460	7,212,718
1株当たり純資産額 (円)	328.27	326.28	300.96	295.34	331.31
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 () (円)	15.94	11.09	11.03	6.48	32.79
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	31.49
自己資本比率 (%)	82.1	79.3	76.4	75.8	73.2
自己資本利益率 (%)	4.9	3.4	3.5	2.2	10.5
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	61.64
営業活動によるキャッシュ・フロー (千円)	173,695	268,968	187,955	39,196	868,602
投資活動によるキャッシュ・フロー (千円)	703,593	1,974,479	810,712	592,036	142,457
財務活動によるキャッシュ・フロー (千円)	1,590,831	6,898	220,017	30,000	183,287
現金及び現金同等物の期末残高 (千円)	1,468,573	3,387,600	4,048,206	3,428,289	4,237,053
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	115 (33)	144 (38)	157 (32)	170 (42)	181 (46)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 第17期、第18期、第19期及び第20期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式は存在するものの、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

3. 第17期、第18期、第19期及び第20期の株価収益率については、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。

4. 従業員数は就業人員数を表示しております。また()内は外書きで臨時従業員(アルバイト)の年間の平均人員を示しており、派遣社員は除いております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第17期	第18期	第19期	第20期	第21期
決算年月	平成26年 3月	平成27年 3月	平成28年 3月	平成29年 3月	平成30年 3月
売上高 (千円)	1,458,029	1,564,335	2,043,791	2,286,405	3,047,387
経常利益又は経常損失 (千円)	13,493	96,782	158,949	30,951	678,428
当期純利益又は当期純損失 (千円)	227,747	102,592	328,403	36,761	545,591
資本金 (千円)	4,969,597	4,973,097	4,973,097	4,973,097	4,973,097
発行済株式総数 (株)	15,922,405	15,929,405	15,929,405	15,929,405	15,929,405
純資産額 (千円)	5,301,229	5,334,874	4,778,575	4,765,924	5,336,424
総資産額 (千円)	6,374,793	6,557,790	5,973,550	5,953,291	6,742,495
1株当たり純資産額 (円)	329.66	331.63	296.71	295.91	332.32
1株当たり配当額 (円)	-	-	-	-	-
(内 1株当たり中間配当額) (円)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
1株当たり当期純利益又は1株当たり当期純損失 (円)	14.89	6.44	20.62	2.31	34.25
潜在株式調整後1株当たり当期純利益 (円)	-	-	-	-	32.89
自己資本比率 (%)	82.3	80.6	79.1	79.2	78.5
自己資本利益率 (%)	4.6	1.9	6.6	0.8	10.9
株価収益率 (倍)	-	-	-	-	59.01
配当性向 (%)	-	-	-	-	-
従業員数 (人)	98	119	129	137	143
(外、平均臨時雇用者数)	(23)	(25)	(19)	(22)	(22)

(注) 1. 売上高には消費税等は含まれておりません。

2. 第17期、第18期、第19期及び第20期の潜在株式調整後1株当たり当期純利益につきましては、1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
3. 第17期、第18期、第19期及び第20期の株価収益率につきましては1株当たり当期純損失であるため記載しておりません。
4. 従業員数は就業人員数を表示しております。また()内は外書きで臨時従業員(アルバイト)の年間の平均人員を示しており、派遣社員は除いております。

2【沿革】

年月	事項
平成9年12月	株式会社アドバンスト・メディア（当社）を東京都中央区日本橋蛸殻町一丁目32番6号に設立。
平成10年1月	Interactive Systems, Inc.社（米国）と日本語音声認識システムAmiVoice®の共同開発を開始し、同時にAmiVoice®をベースとした音声認識市場の構築事業に着手。
平成11年3月	AmiVoice®の評価・改良のために「音声認識ソフトウェアの研究コンソーシアム（IVSRG）」を結成し、開発支援ツールキットAmiVoice® SDK（バージョン1.0）をリリース開始。
平成12年7月	本社を東京都豊島区東池袋三丁目1番1号に移転。 開発支援ツールキットAmiVoice® SDK（バージョン3.0）をリリースし、ソリューションサポート事業を開始。
平成12年11月	ホームページ音声認識アプリケーションAmiVoice® Webをリリースし、企業向けのライセンス事業を開始。
平成13年11月	開発委託先である関連会社Multimodal Technologies, Inc.社（米国）設立。 Interactive Systems, Inc.社をMB0によりMultimodal Technologies, Inc.社に吸収。当社より、取締役2名を派遣。
平成14年3月	分散型音声認識AmiVoice®/DSR（Distributed Speech Recognition）を発表。 医療分野での音声入力の前駆のパッケージである放射線画像診断レポート用音声認識アプリケーションAmiVoice® Medical for Radiologyをリリース。
平成15年8月	議事録作成支援アプリケーションAmiVoice® Rewriter、コールセンター向け通話録音のテキスト化アプリケーションAmiVoice® CallScriber等をリリースし、高付加価値のライセンス事業を開始。
平成17年3月	愛知万国博覧会に当社の対話技術を装備した4カ国語対応の受付案内ロボット（アクトロイド）をリリース。
平成17年6月	株式会社東京証券取引所マザーズに株式を上場。
平成19年8月	富士通株式会社製FOMA端末「らくらくホンIV」に、AmiVoice® DSRクライアント採用。
平成19年11月	当社初、一般コンシューマー向け音声認識ソフトウェア「AmiVoice® Es 2008」をリリース。
平成20年2月	本社を東京都豊島区東池袋三丁目1番4号に移転。
平成20年4月	株式会社ベネッセコーポレーションの提供する次世代型通信教育講座「進研ゼミ+i」にAmiVoice®が採用。
平成20年9月	タイにおける音声認識ソリューションの開発、提供を目的としてAMIVOICE THAI CO.,LTDを設立。
平成20年10月	「音声入力メール」における音声認識技術が、独立行政法人情報処理推進機構（IPA）主催の「ソフトウェア・プロダクト・オブ・ザ・イヤー@2008」を受賞。
平成21年5月	「議事録作成支援システム」が東京都議会の全常任委員会で導入。
平成21年7月	iPhone向け「音声認識メール」の有償販売を開始。
平成21年8月	株式会社ニチイ学館との資本業務提携契約を締結。
平成21年11月	コールセンター向け音声統合ソリューション「AmiVoice® Communication Suite」をリリース。
平成22年6月	東邦薬品株式会社との共同開発品、音声認識薬歴作成支援システム「ENIFvoice SP」をリリース。
平成22年7月	一般コンシューマー向け音声認識ソフト「AmiVoice® SP」を販売開始。
平成23年8月	持分法適用関連会社Multimodal Technologies, Inc.（米国）株式全てを、MedQuist Holdings, Inc.（米国、NASDAQ 上場）に譲渡。
平成23年9月	Webアプリ向けのクラウド型音声認識サービス「音声認識ブラウザ for iOS/Android」をリリース。
平成24年6月	企業向け音声認識クラウドサービス「AmiVoice® Cloud」をリリース。
平成24年11月	KDDI株式会社の声でスマートフォンを操作できるアプリ「おはなしアシスタント」にAmiVoice®を提供。 音声認識ソフト「AmiVoice® SP2」販売開始。 NTTドコモ2012冬モデルスマートフォン AQUOS PHONE ZETA SH-02E（シャープ製）に音声認識技術AmiVoice®を提供。 株式会社ニチイ学館との資本・業務提携の解消。
平成25年5月	株式会社ウィズ・パートナーズが組成した「ウィズ・アジア・エボリューション・ファンド投資事業有限責任組合」を割当先とする第1回無担保転換社債型新株予約権付社債および第3回新株予約権を発行。また、同社と投資契約を締結。

年月	事項
平成25年9月	国内外の住宅内における音声認識の活用を拡げるために株式会社グラモを子会社化。
平成25年10月	1株につき100株の割合をもって株式分割。また単元株制度を採用し単元株式数を100株に設定。
平成25年11月	クラウド型音声認識文字起こしサービス「VoXT」をリリース。
平成25年12月	大阪に既存ビジネスの拡大および新機軸サービス事業の取り組みを加速させるために「ビジネス開発センター」を設立。
平成26年7月	株式会社サトーと、ウェアラブル型ボイスピッキングシステム「AmiVoice® iPicking」を共同開発。
平成26年8月	文字起こし市場の創出・拡大のために株式会社速記センターつくばを子会社化。
平成26年9月	株式会社グラモがIoT市場化に向けて環境センサー（温度、湿度、照度）付「iRemocon Wi-Fi」をリリース。
平成26年11月	タイの大手通信事業会社Trueグループとの合併会社「True Voice Company Limited」をタイ王国に設立。
平成26年12月	医療・調剤・介護向けクラウド型音声入力サービス「AmiVoice® CLx」をリリース。
平成27年1月	DNN(ディープニューラルネットワーク)技術をAmiVoice®に実装。
平成27年3月	「AmiVoice® Communication Suite」の導入社数、累計100社超え。
平成27年9月	音声認識・音声対話専用のバジ型ウェアラブルデバイス「AmiVoice® Front WT01」をリリース。 人工知能技術を活用したバーチャルオペレーターソリューション「AmiAgent」をリリース。
平成27年12月	ボイス検査ソリューション「AmiVoice® スーパーインスペクター」をリリース。
平成28年3月	株式会社グラモが総額2億円の第三者割当増資を実施。 三菱東京UFJ銀行のAI音声対話アプリに「AmiAgent®」が採用。
平成28年6月	議事録作成支援システムの自治体導入実績が累計100件超え。
平成28年7月	株式会社グラモが株式会社レオパレス21と「Leo Remocon」を共同開発し、新築全戸に標準採用が決定。 音声認識インカムサービス「AmiVoice® INCOM」をリリース。
平成28年10月	音声コンテンツの分析・蓄積・検索技術とソリューションを有するAudioBurst Ltd.（イスラエル）と資本業務提携を締結。
平成28年11月	音声認識 多言語翻訳サービス「AmiVoice® TransGuide」をリリース。
平成29年2月	三井住友銀行のコールセンターに「AmiVoice® Communicaition Suite2」とIBMwatsonの連携ソリューションが採用。 中国大手生命保険会社コールセンターでのAmiVoice®活用事例が中国金融電子化会社の主催する「2016年 金融技術サービス優秀賞」で開発創新貢献賞を受賞。
平成29年3月	医療カンファレンス向け音声認識議事録作成支援ソフトウェア「AmiVoice® Medical Conference」をリリース。
平成29年4月	医療・介護向けモバイル版 クラウド型音声入力サービス「AmiVoice® MLx」をリリース。
平成29年7月	音声認識技術・感情解析技術により顧客対応状況を座席ごとに可視化したコールセンター向けAIソリューション「AmiVoice® Communicaition Suite3」をリリース。 訪問医療・介護向けクラウド型音声入力管理サービス「AmiVoice® iVoX Medical」をリリース。
平成29年8月	建築工程管理のプラットフォームサービス「AmiVoice® スーパーインスペクションプラットフォーム」をリリース。
平成29年11月	報道機関向け音声文字化システム「AmiVoice® Recorder Lite」をリリース。
平成29年12月	株式会社グラモがスマートスピーカーと連携し、住宅を自動でコントロールするための次世代IoTスマートホーム自動制御システムを開発。
平成30年1月	音声入力メモアプリ「AmiVoice® iVoX Personal」をリリース。
平成30年2月	建築工程管理のプラットフォームサービス「AmiVoice® スーパーインスペクションプラットフォーム（SIP）」にAIで施工協力会社を自動選定する新機能（SIP-AI）を搭載。
平成30年3月	iOS版の音声入力キーボードアプリ「AmiVoice® SBx」をリリース。

3【事業の内容】

当社グループ（当社および当社の関係会社）は、当社（株式会社アドバンスト・メディア）と連結子会社4社、持分法適用会社1社により構成されており、事業セグメントは、音声事業の単一セグメントであります。

音声事業

当社グループは、音声認識技術AmiVoice®を核とした事業を展開しております。その事業内容は、AmiVoice®を組み込んだ音声認識ソリューションの企画・設計・開発を行う「ソリューション事業」、AmiVoice®を組み込んだアプリケーション商品をライセンス販売する「プロダクト事業」、企業内のユーザーや一般消費者へAmiVoice®をサービス利用の形で提供する「サービス事業」の3つを行っています。

なお、音声事業の単一セグメントは、既存コアビジネスを第一の成長エンジン、新規ビジネスの創生、M&A、海外事業を第二の成長エンジンと定義し、10のプロフィットユニットで構成されております。

第一の成長エンジン（既存コアビジネス）

当社のCTI事業部、SEC事業部、クラウド事業部、医療事業部、VoXT事業部の5つのプロフィットユニットで構成をしております。

第二の成長エンジン（新規ビジネスの創生、M&A、海外事業）

当社の海外事業部、ビジネス開発センター、および連結子会社のAMIVOICE THAI CO., LTD.（タイ王国）、株式会社グラモ、株式会社速記センターつくばの5つのプロフィットユニットで構成をしております。

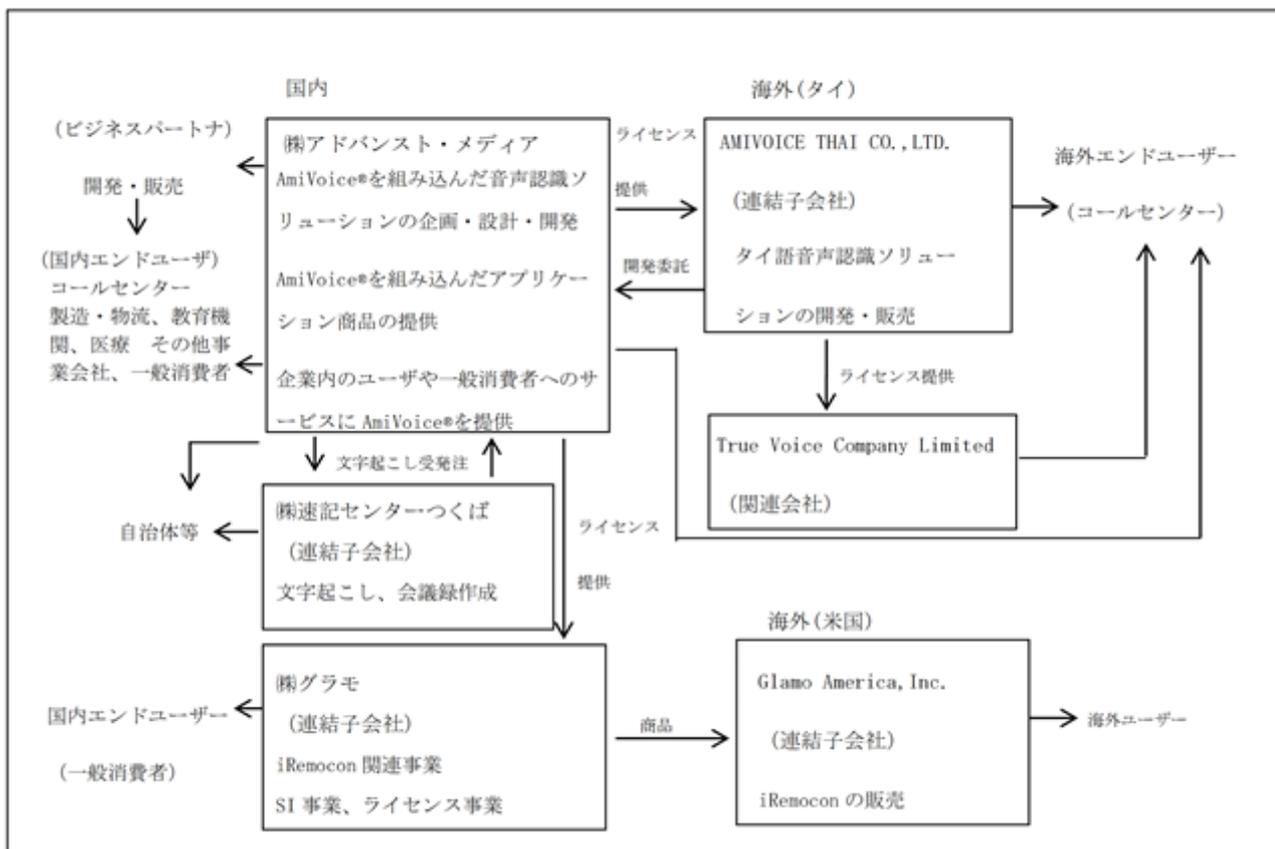
分野別の導入事例および代表的な製品は次の表のとおりです。

分野	導入事例および代表的な製品	
コールセンター	業務効率化・コンプライアンス強化・音声と文字による通話モニタリング・対応品質向上など、音声認識技術を活用した新しいコールセンター向けソリューションを提供。	
	導入事例	銀行、生命保険会社、メーカー、製薬会社、通信販売会社218社に導入（2018年3月末現在） 株式会社三井住友銀行 株式会社三菱東京UFJ銀行 大同生命保険株式会社 三井生命保険株式会社 朝日生命保険相互会社 日本生命保険相互会社 三井住友カード株式会社 株式会社ジャルカード 東邦薬品株式会社 株式会社ジャパネットホールディングス 株式会社スカパー・カスタマーリレーションズ 株式会社日立ハイテクフィールドディング 株式会社日立システムズ 株式会社ベルシステム24 株式会社レオパレス21
	製品	音声認識トータルソリューション 「AmiVoice® Communication Suite」 音声認識クラウドソリューション 「AmiVoice® Communication Suite Cloud」 通話録音を全文テキスト化 「AmiVoice® MediaScriber」 通話を探す・見る・聞く・活用 「AmiVoice® SpeechVisualizer」
製造・物流・流通	ハンズフリー・アイズフリーで現場作業の負担を軽減。入出庫管理・在庫管理・棚卸し・ピッキング・製品検査・検品・各種伝票作成・製造工程管理等に活用可能。	
	導入事例	車両監査業務で音声認識を使ったキーボード入力（岐阜車体工業） 物流現場で音声認識を使用した仕分けシステム（株式会社銀座コージーコーナー） 音声認識を活用した声によるFAXなどの受注伝票入力システム（和光堂株式会社）
	製品	音声認識キーボード入力システム 「AmiVoice® Keyboard」 ボイスピッキングシステム 「AmiVoice® iPicking」 音声認識・音声対話専用のバッジ型ウェアラブルマイクデバイス 「AmiVoice® Front WT01」 Windows向け音声入力ソフト 「AmiVoice® Ex7 Business」

モバイル	スマートフォン・タブレットなどのモバイル端末に新しい入力インターフェースを提供。もっと使 いやすく楽しめるモバイルアプリケーションを実現。	
	導入事例	阪急電鉄の主要駅28駅へ音声認識多言語アナウンスサービス(阪急電鉄株式会社) モバイル型ロボット電話「RoBoHoN」(シャープ株式会社) AI音声対話アプリ「バーチャルアシスタント」(株式会社三菱 UFJ 銀行) 「おはなしアシスタント」(KDDI株式会社) au2015年春モデル4G LTEケータイ「AQUOS K SHF31」(シャープ株式会社) 「MR活動報告アプリケーション」(第一三共株式会社) NTTドコモ「らくらくホンシリーズ」(富士通製) カーナビアプリ「カーナビタイム(iOS版)」「NAVITIMEドライブサポーター(iOS 版)」(株式会社ナビタイムジャパン)
	製品	音声認識クラウドサービス 「AmiVoice® Cloud」 音声認識開発キット 「AmiVoice® SDK」 業務の可視化ソリューション 「AmiVoice® iVoX KIZUKI」 多言語翻訳サービス 「AmiVoice® TransGuide」 バーチャルオペレーターソリューション 「AmiAgent」 iPhone向けアプリケーション 「AmiVoice SBx」「AmiVoice iVoX Personal」 「音声認識メールクラウド」「AOI Browser」
教育	語学教育における発音評定の分野で高校・大学施設および一般消費者向け製品を展開。 e-learningを展開する教育関連企業に発音評定ソフトを提供。 外国人留学生向け日本語発音矯正ソフトを展開。	
	導入事例	高校・大学317施設以上に導入(2018年3月末現在) 小学生向け英語教材「Challenge English」(株式会社ベネッセコーポレーショ ン) 「英語発音アプリ道場」(株式会社ワオ・コーポレーション)
	製品	教育施設向け英語発音矯正ソフト 「AmiVoice® CALL-pronunciation-」 一般向け英語発音矯正ソフト 「AmiVoice® CALL Lite-pronunciation-」 外国人向け日本語学習ソフト 「AmiVoice® CALL Web-Japanese-」
医療	医療専門用語を標準搭載した音声入力システムを提供。話すだけで手軽に電子カルテや読影レポ ート、調剤薬歴などを入力でき、忙しい医療現場での業務効率化を実現。	
	導入事例	病院、診療所、放射線科、調剤薬局など全国5,980施設に導入(2018年3月末現 在) (日本調剤株式会社、クラフト株式会社、北海道大学病院、大阪大学医学部附属 病院、聖路加国際病院、熊本赤十字病院、松下記念病院、順天堂大学練馬病院、 東京女子医科大学病院、東京医科大学病院、株式会社大阪先端画像センター、東 京慈恵会医科大学附属病院、東海大学医学部付属病院、旭川医科大学付属病院、 防衛医科大学付属病院、国立病院機構新潟病院、昭和大学藤が丘病院、国立病院 機構相模原病院)
	製品	診療所/病院電子カルテ向け 「AmiVoice® Ex7Clinic/Hospital」 放射線読影診断レポート向け 「AmiVoice® Ex7 Rad」 調剤電子薬歴向け 「AmiVoice® Ex7 Pharmacy」 病理レポート 「AmiVoice® Ex7 Path」 内視鏡レポート作成向け 「AmiVoice® EX7 Endoscope」 整形外科電子カルテ向け 「AmiVoice® Ex7 Orthopaedic」 医療メール・論文作成用 「AmiVoice® Ex7 MedMail」 医療・調剤・介護向け クラウド型音声入力サービス 「AmiVoice® CLx」 医療カンファレンス向け 音声認識 議事録作成支援ソフトウェア 「AmiVoice® Medical Conference」 訪問医療・介護向けクラウド音声入力管理サービス 「AmiVoice® iVoX Medical」

議事録・書き起こし	議事録支援システムを自治体および民間企業に提供。発言内容をリアルタイムにテキスト化し、議事録作成業務・書き起こしの効率化を実現。情報公開のスピード化、業務量の軽減、コスト削減を実現。	
	導入事例	東京都議会、北海道議会、宮城県議会、広島県議会、神奈川県庁、兵庫県庁、福島県庁、伊勢市議会、笠間市役所、佐賀市議会、沼津市議会、箱根町議会等自治体、湘南信用金庫、大手民間企業、放送局等237施設に導入（2018年3月末現在）
	製品	議事録作成ソリューション 「AmiVoice® 議事録作成支援システム」 「SpeechWriter」 クラウド型文字起こしサービス 「VoXT」
建設・不動産	ゼネコンや不動産業界向けの音声認識プラットフォームサービス。検査や議事録作成などの業務効率化と品質向上を実現。建設・不動産会社99社に導入（2018年3月末現在）	
	製品	建築工程管理のプラットフォームサービス 「AmiVoice® スーパーインスペクションプラットフォーム（SIP）」 「AmiVoice® SIP-AI」 音声認識議事録作成プラットフォームサービス 「AmiVoice® スーパーミーティングメモ」
コンシューマー向け	マイクに向かって話すだけでサクサク入力できる音声入力ソフト。各種報告書や電子メールの作成などビジネス用途、チャットやブログなどのプライベートでの使用など、入力作業や書き起こしの効率化を実現。	
	製品	音声認識ソフト 「AmiVoice® SP2」

事業の系統図は、次のとおりであります。



4【関係会社の状況】

(平成30年3月31日現在)

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の所有割合又は被所有割合(%)	関係内容
(連結子会社) AMIVOICE THAI CO.,LTD.	Bangkok Thailand	27,000千タイバーツ	音声事業(音声認識ソリューションの開発および提供)	100.0	タイにおける当社音声認識ソリューションの開発および提供 役員の兼任 2名
(株)グラモ (注)3	東京都豊島区	80,000千円	音声事業(音声認識技術を利用したHEMS関連機器の販売)	66.32	当社音声認識技術を利用したHEMS関連機器を主に国内にて販売 設備の賃貸 役員の兼任 1名
(株)速記センターつくば	茨城県取手市	10,000千円	音声事業(文字起こし、会議録作成)	100.0	文字起こし、会議録作成の発注・受注
Glamo America, Inc. (注)2	米国ネバダ州	10千米ドル	音声事業(音声認識技術を利用したHEMS関連機器の米国販売)	66.32 (66.32)	当社音声認識技術を利用したHEMS関連機器を米国にて販売
(持分法適用関連会社) True Voice Company Limited	Bangkok Thailand	24,000千タイバーツ	音声事業(音声認識技術を活用したシステムの開発・販売・導入・保守)	45.0	当社音声認識技術を活用したシステムの開発・販売・導入・保守)

(注)1. 「主要な事業の内容」の欄には、セグメントの名称を記載しております。

2. 議決権の所有割合の()内は、間接所有割合で内数であります。

3. 特定子会社に該当しております。

5【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

(平成30年3月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(人)
音声事業	181 (46)

(注)1. 従業員数は就業人員を表示しております。また()内は外書きで臨時雇用者数(アルバイト)の年間の平均人員を示しており、派遣社員は除いております。

2. 従業員数が前連結会計年度末に比べ増加しましたのは、主に営業・開発人員の増加によるものです。

(2) 提出会社の状況

(平成30年3月31日現在)

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
143(22)	39.2	6.82	5,935

セグメントの名称	従業員数(人)
音声事業	143(22)

(注)1. 従業員数は就業人員を表示しております。また()内は外書きで臨時雇用者数(アルバイト)の年間の平均人員を示しており、派遣社員は除いております。

2. 当社は年俸制を採用しており賞与の制度を設けておりません。

3. 従業員数が前事業年度末に比べ増加しましたのは、主に営業・開発人員の増加によるものです。

(3) 労働組合の状況

当社グループにおいて労働組合は組織されておりませんが、労使関係は良好であります。

第2【事業の状況】

1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

(1)経営方針

当社グループは、「HCI (Human Communication Integration) の実現」をビジョンに掲げ、人が機械に自然に意思を伝えられる「ソフトコミュニケーションの時代」を拓くべく、有用な最先端技術を広く社会へ普及させ、その実用化を通して新しい価値観、文化を創造してまいります。

(2)目標とする経営指標

当社グループの経営指標とその目標は、3年間で売上高を2倍（年平均30%増）、営業利益率30%を目標にし、増収増益を継続していくことです。

(3)経営環境、経営戦略及び対処すべき課題等

BSRビジネスへの進化

「既存コアビジネスのさらなる成長」をBSR1（第一の成長エンジン）、「新規ビジネスの創生・M&A・海外事業」をBSR2（第二の成長エンジン）と位置付け、これら音声認識ビジネスに人工知能などを付加し価値を増幅させたBSR（超音声認識）ビジネスに進化させてまいります。

「AI音声認識」と「音声AI」

働き方改革の推進、労働力人口の減少等から、各企業における生産性向上・業務効率化への意識が高まりました。そのような背景のもと、当社のコア技術である「AI音声認識」（AIにより認識精度などが向上した音声認識：AmiVoice®）や「音声AI」（音声認識を含む音声処理を前提としたAI技術：AmiAgent®）の利用を、引き続き増大させてまいります。

増収増益構造の実現

2020年3月期までをBSR導入期、2023年3月期までをBSR展開期、2026年3月期までをBSR拡大期とし、3年間で売上高をそれぞれ2倍（年平均30%増）にしてまいります。当連結会計年度につきましては、BSR1の増益に加えて、BSR2を黒字化させ当社グループ全体での増益を継続させてまいります。

2【事業等のリスク】

当社グループの業績は、今後起こり得る様々な要因により大きな影響を受ける可能性があります。

以下に当社グループの事業展開上のリスク要因となる可能性があると考えられる主な事項を記載しております。当社グループは、当社グループでコントロールできない外部要因や事業上のリスクとして具体化する可能性は必ずしも高くはないと見られる事項も含め、投資家の投資判断上重要と考えられる事項については、積極的に開示しております。当社グループは、これらのリスクが発生する可能性を認識したうえで、その発生予防および対応に努力する方針ですが、当社グループの経営状況および将来の事業についての判断は、以下の記載事項を慎重に検討したうえで行われる必要があると考えております。また、以下の記載は当社株式への投資に関するリスクを全て網羅するものではありません。

業績の変動について

A 経営成績について

当社グループは、「既存コアビジネスのさらなる成長」をBSR1（第一の成長エンジン）、「新規ビジネスの創生・M&A・海外事業」をBSR2（第二の成長エンジン）と位置付け、これら音声認識ビジネスに人工知能などを付加し価値を増幅させたBSR（超音声認識）ビジネスに進化させてまいります。これらによって、3年間で売上高を2倍（年平均30%増）営業利益率30%を目指してまいります。音声認識市場創造の遅延、外部環境の変化等、当社が想定できない諸般の要因で、当社の事業が計画どおりに進捗しなかった場合には、想定している経営成績に影響する可能性があります。

B 四半期毎の業績の変動

当社グループの音声事業は、ライセンス収入・パッケージ販売の増加、受託開発案件のクライアントへの出荷および検収の早期化を図っておりますが、出荷および検収が毎年9月および3月に集中する傾向があります。従来の売り切りビジネスは拡大させつつ、月額課金、従量課金モデルのストック型サービス（フロー・ストック・サービス）を加えることで、その変動を抑えて参りますが、今後も同様の傾向が暫く続く可能性があります。

C 予算編成

予算は経営管理本部を中心とした予算編成体制を構築し、予実精度の向上に努めております。しかし、音声認識市場の創造を行いながらビジネスを進めており、当社が手掛ける各事業の将来予測が難しい部分があることや、昨今の経済環境の急激な変化等想定できない外部要因による影響を受ける場合があります。よって、各事業で予算と実績の管理を徹底し、予実の乖離が起らないように努めますが、今後も乖離が発生する可能性があります。なお、当社は予算と実績の乖離が発生した段階で、速やかに業績修正の開示を行います。

音声認識市場創造が遅延すること

当社は今後成長が見込まれる音声認識市場の分野をコールセンター、医療、議事録作成・文字起こし、教育・エンターテインメント、物流・産業用データターミナル、モバイル、カーナビゲーション、ホームエレクトロニクス、福祉・介護、障害者用機器、不動産・建築等と認識しており、こうした分野における事業展開および事業創造を行ってまいります。今後はこれらのビジネス分野に加え、一般の消費者に対しても積極的に事業を創造していく予定ですが、市場創造が予想どおりに行えず、長い時間を要する可能性もあります。

音声認識技術について

A 新製品及び新技術の開発

現在、音声認識の基礎的な開発は終了し、既に様々な商品を販売しておりますが、今後とも技術の革新と向上が必須です。「音声入力インターフェイス」として利用者が「ないと困る」を感じるためには、単なる音声認識精度の向上のみではなく、対話機能の高度化、口語体文章認識能力の向上、辞書・言語モデルの広汎化および耐雑音性の強化等の技術開発が必要であり、当該開発に資金や時間が想定以上に必要となった場合、あるいは当社グループが想定する売上計画が達成できなくなり、先行的に支出された研究開発費等の回収が困難になった場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

B 音声認識技術に代替する新技術の誕生

音声認識技術に代わる新しいインターフェース等の誕生、普及により、当社の技術優位性がなくなる等、当社が明確な競争優位性を確保できなくなった場合には、当社グループの経営に影響を与える可能性があります。

C 競合他社について

当社グループの音声事業の競合製品には、国内外の音声認識事業者や各社の音声認識事業部門が開発した製品等が挙げられます。現時点では当社の製品は、高い認識率、速い認識処理、不特定話者対応、発話スピードへのフレキシブルな対応、発話者のイントネーションやアクセント等の違いへの対応、耐雑音性能等の点で国内外の競合他社の製品と差別化されると考えておりますが、将来的に高い技術力および開発力を有する競合企業が出現することは否定できず、競争の激化によって当社の優位性が失われた場合、また、競合他社が他の有望な音声認識市場を創造開拓し、当社グループが後塵を

拝した場合には、当社グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、当社の音声認識技術が技術的に秀でていたとしても、他の音声認識事業者がアライアンス・パートナー戦略で優位に立った場合、当社の音声認識技術が音声認識市場での高シェアを獲得できない可能性があります。

D Multimodal Technologies, LLC (MTL社) について

当社の音声認識技術のプログラムの一部は、MTL社が開発した技術を使用しております。同社とは良好な技術支援関係を構築しております。同社とは、当社自らが自由に当該プログラムの改訂・改良・機能強化のための開発ができる契約を締結しており、市場環境の変化や顧客からの様々な要望に対応した開発を行っております。また、MTL社と当社は、全世界において独占的にその成果物を当社製品に組み込んで販売（サブライセンス等による間接的な販売形態を含む）できる契約を締結しております。一連の契約により、当社が音声認識技術のプログラムに、MTL社の開発した技術を使用する権利は保護されており、MTL社とは良好な関係を保っております。しかしながら今後、何らかの理由によりMTL社との協力関係に支障をきたした場合は、現在受けている同社からの技術的な支援を得られなくなる可能性はあり、その場合当社の事業運営に影響を及ぼす可能性があります。

当社の組織について

A 人材の育成について

当社グループは、現段階では事業運営に適した従業員数および組織形態となっております。しかしながら、業務に従業員個人の技量や経験・ノウハウに依存している部分もあります。そのため、各部署における既存の人材の社外流出・病欠等による長期休暇・欠勤等が生じた場合、当社グループの事業活動に支障が生じ、業績に影響を及ぼす可能性があります。このため、従業員間における技量・ノウハウの共有化を組織として進めるとともに、従業員個人の技量や経験・ノウハウなどの研鑽環境の充実を経営の重要課題と捉えています。

B 人材の確保について

当社グループでは優秀で意欲に満ちた魅力ある人材を確保できるよう、自由で創造性に満ちた企業文化の醸成に力を入れておりますが、今後当社グループが必要とする人材が、必要な時期に確保できる保証はなく、人員計画に基づいた採用が行えなかった場合、当社グループの経営に影響を及ぼす可能性があります。

C 特定の人物への業務の依存について

当社グループの業務執行は、創業者である代表取締役会長兼社長をはじめとし、キーパーソンの継続的な勤務に依存している部分があります。キーパーソンは、当社グループの業務に関して専門的な知識、技術、経験などを有しています。彼らが当社グループを退職し、当社グループが適確な後任者の採用に失敗した場合、事業の継続、発展に悪影響が生じる可能性があります。

法的なリスクについて

A 知的財産権について

当社グループが第三者の知的財産権を侵害する可能性、および当社グループが今後進出する事業分野において知的財産を取得できず、さらに第三者から必要なライセンスを取得できない可能性があります。当社の音声認識技術及び音声認識ソリューションは広範囲にわたる技術を利用しており、その技術が第三者の保有する知的財産権を侵害しているという主張が当社に対してなされる可能性が皆無ではなく、その結果は予測できません。

B 特有の法的規制・取引慣行について

現在、当社グループの事業に悪影響を与えるような法的規制はありませんが、今後も制定されないという保証はありません。もし、かかる法的規制が制定されたり、解釈が不明瞭な規制が制定されたりした場合、当社グループの業績に影響を与えたり、事業展開のスピードに悪影響を及ぼす可能性があります。

C 個人情報保護について

当社はプライバシーマークを取得しており、個人情報の保護について最大限の注意を払っております。しかしながら、個人情報が当社グループ関係者や業務提携・委託先などの故意または過失により外部に流出したり、悪用されたりする可能性が皆無ではありません。このようなことが起こった場合、当社グループのサービスが何らかの悪影響を受けたり、ブランドイメージが低下したり、法的紛争に巻き込まれる可能性があります。

為替リスク

当社グループは、資産の一部を外貨預金等で保有しており、為替レートに予期しない大きな変動が生じた場合、当社グループの経営成績および財政状態等に影響を及ぼす可能性があります。

投資・M&A等の事業展開について

当社グループは、音声認識技術を活用した新サービスの立上げおよびアジアを中心としたグローバルなビジネスの展開を重要な経営目標と位置付けております。そのため、それらの経営目標を早期に達成するために投資やM&A等は、迅速かつ効率的・効果的手段の一つと考えております。

そこで当社グループは、投資やM&A等を行う場合においては、対象企業の財務内容や契約関係等について詳細なデューデリジェンスを行うことによって、極力リスクを回避するように努めてまいります。しかし、買収後その他における偶発債務の発生等、未認識の債務が判明する可能性も否定できません。また、投資やM&A等にあたっては、事業環境や競合状況の変化等により当初の事業計画の遂行に支障が生じ、当社グループの事業展開への影響が生じるリスクや、投資を十分に回収できないリスク等も存在しており、結果的に当社グループの業績および財政状態に影響を与える可能性もあります。また国外企業を対象とした場合には、上記のリスク以外にカントリーリスクや為替リスクを被る可能性もあります。

3【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1)経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループ（当社、連結子会社及び持分法適用会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

財政状態及び経営成績の状況

（経営成績の状況）

当連結会計年度におけるわが国経済は、企業収益・雇用環境等に改善の動きがみられ、景気は緩やかな回復基調で推移しました。

当社グループは、「既存コアビジネスのさらなる成長」をBSR1（第一の成長エンジン）、「新規ビジネスの創生・M&A・海外事業」をBSR2（第二の成長エンジン）と位置付けております。当連結会計年度においては、これらの音声認識ビジネスに人工知能などを付加し価値を増幅させたBSR（超音声認識）ビジネスに進化させていくことで、当社グループ全体での営業利益の黒字化を実現し、今後の継続的な増収増益を実現するスタートの期と位置付けておりました。

そのような中、働き方改革の推進、労働力人口の減少等から、各企業における生産性向上・業務効率化への意識が高まりました。そのような背景のもと、当社のコア技術である「AI音声認識」（AIにより認識精度などが向上した音声認識：AmiVoice®）や「音声AI」（音声認識を含む音声処理を前提としたAI技術：AmiAgent®）の利用が好調に推移いたしました。その結果、売上高に関しましては、BSR1（第一の成長エンジン）は前期比34.1%増、BSR2（第二の成長エンジン）は前期比78.3%増、当社グループ全体では前期比42.7%増と、当初の目論み通り増収構造を作ることができました。

損益に関しましては、売上高が大幅に伸長するとともに収益性の高いライセンス収入等により粗利益率が向上しました。その結果、BSR1（第一の成長エンジン）が前期比8.8倍と大幅な増益を実現し、BSR2（第二の成長エンジン）は計画通り前期比で赤字幅を縮小させ、当社グループ全体で黒字化し過去最高の営業利益を実現いたしました。経常利益および親会社株主に帰属する当期純利益についても黒字となり、損益面においても、当初の目論み通り増益構造を作ることができました。

これらの結果、当第連結会計年度の売上高は3,683百万円（前年同期は売上高2,581百万円）、営業利益647百万円（前年同期は営業損失77百万円）、経常利益610百万円（前年同期は経常損失118百万円）、親会社株主に帰属する当期純利益は522百万円（前年同期は純損失103百万円）となりました。

音声事業の各分野別の状況は、以下のとおりであります。

CTI事業部（BSR1）

コールセンター業界において、AIや音声認識技術を活用するニーズが顕在化し、当社の今までの実績が評価され、導入件数の増加、案件の大型化が進んだ結果、収益性の高いライセンスの売上が大幅に伸びました。よって、前期比73.4%増と大幅に増収するとともに、収益面でも粗利益率が向上したため大幅に増益し、当社グループ全体の業績を牽引いたしました。

SEC事業部（BSR1）

「音声AI」（音声認識を含む音声処理を前提としたAI技術：AmiAgent®）を中心とした、音声対話の新たな市場を創造してまいりました。そのような中、株式会社レオパレス21、株式会社明治産業、日本瓦斯株式会社、株式会社DeNAトラベル等に導入（導入検証）が進み、前期比45.3%増と増収しました。

クラウド事業部（BSR1）

「AI音声認識」や「音声AI」の利用が進む中で、音声認識・音声対話に特化した当社独自のウェアラブルマイク端末「AmiVoice® Front WT01」の販売が伸びました。また、様々な分野における音声入力需要が増大し、特に製造・物流分野でのウェアラブル型ボイスピッキングシステム「AmiVoice® iPicking」の販売が堅調に進みました。前期比21.1%増と増収しました。

医療事業部（BSR1）

クラウド型音声入力モバイルサービス「AmiVoice® MLx」や、スマートフォンに話すだけで簡単に録音、記録の作成・管理・共有が可能になるクラウド型音声入力管理サービス「AmiVoice® iVoX Medical」の販売を開始し、医療業界向けの製品ラインナップの拡充を行いました。あわせて、既存製品の拡販も推進し前期比15.1%増と増収しました。

VoXT事業部（BSR1）

音声認識技術AmiVoice®を活用した議事録作成支援システム、廉価版の「AmiVoice® SpeechWriter」やクラウド型文字起こしサービス（VoXT）などの利用料サービスが、大手民間企業や報道機関向けに採用が進み、前期比3.9%増となりました。

海外事業部・ビジネス開発センター（BSR2）

海外事業部は、既存顧客の拡張案件の獲得や、中国における新規顧客獲得に向けたパートナー戦略を推進しました。しかしながら、想定していた事業拡大ができず、パートナー戦略の再構築を進めた結果、前期比で減収となりました。

ビジネス開発センターは、人手不足が深刻化している建設業界に対して、建築図書保存/管理・配筋検査・配筋写真管理・建築仕上げ検査の各種現場での業務を効率化する建築工程管理のプラットフォームサービス「AmiVoice® スーパーインスペクションプラットフォーム（SIP）」、「AmiVoice® SIP-AI」のユーザー数を堅調に増やし、前期比113.3%増と大幅に増収しました。

連結子会社（BSR2）

AMIVOICE THAI CO., LTD.（タイ王国）は、既存顧客の拡張案件および新規顧客の受注獲得等を進め、前期比121.7%増と大幅に増収しました。

株式会社グラモは、株式会社レオパレス21向けに、スマートフォンによる家電制御機器『Leo Remocon』や、スマートロック製品『Leo Lock』製品の納入が堅調に進みました。また、パネルメーカーなど大口顧客へのiRemoconの販売と拡販が堅調に進み、前期比140.7%増と大幅に増収しました。

株式会社速記センターつくばは、自治体向け・裁判所向け・民間向け案件の受注獲得等を進め、前期比6.6%増となりました。

（財政状態の状況）

当連結会計年度末の総資産は7,212百万円（前期連結会計年度末比1,006百万円の増加）となりました。売上高の大幅な増加等により、現金及び預金は796百万円の増加となりました。

有形固定資産はほぼ変わらず、無形固定資産はソフトウェア37百万円等の増加、投資その他の資産のうち投資有価証券は評価減により17百万円の減少、長期前払費用46百万円の減少等となりました。

当会計年度末の負債合計は1,708百万円（前期連結会計年度末比468百万円の増加）となりました。子会社であるグラモ社の借入残高は183百万円、黒字化により未払法人税等が95百万円の増加、未払消費税等が56百万円の増加が主な要因です。

キャッシュ・フローの状況

	（単位：百万円）	
	前連結会計年度	当連結会計年度
営業活動により増加（は減少）したキャッシュ（純額）	39	868
投資活動により増加（は減少）したキャッシュ（純額）	592	142
財務活動により増加（は減少）したキャッシュ（純額）	30	183
現金及び現金同等物に係る換算差額	18	100
現金及び現金同等物純増減額（は減少）	619	808

当連結会計年度末における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は前連結会計年度末に比べ808百万円増加し、4,237百万円となりました。

各キャッシュ・フローの状況とその要因は次のとおりです。

営業活動によるキャッシュ・フロー

営業活動の結果、獲得した資金は868百万円となりました。これは主に税金等調整前当期純利益589百万円を計上したことによるものであります。

投資活動によるキャッシュ・フロー

投資活動の結果、使用した資金は142百万円となりました。これは主に無形固定資産の取得による支出205百万円によるものであります。

財務活動によるキャッシュ・フロー

財務活動の結果、獲得した資金は183百万円となりました。これは主に借入金の払込みによる収入によるものであります。

生産、受注及び販売の実績

(1) 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	前年同期比(%)
音声事業(千円)	936,264	111.6
合計(千円)	936,264	111.6

- (注) 1. 生産実績は当期総製造費用で表示しております。
2. 上記の金額には消費税等は含まれておりません。

(2) 受注実績

当連結会計年度における受注実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	受注高(千円)	前年同期比(%)	受注残高(千円)	前年同期比(%)
音声事業	3,698,671	155.8	560,277	133.4
合計	3,698,671	155.8	560,277	133.4

- (注) 上記の金額は販売価格によっており、消費税等は含まれておりません。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	前年同期比(%)
音声事業(千円)	3,683,329	142.7
合計(千円)	3,683,329	142.7

- (注) 本表の金額には消費税等は含まれておりません。

(2)経営者の視点による経営成績の状況に関する検討内容

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。

当連結会計年度の経営成績の分析

当社グループは、「既存コアビジネスのさらなる成長」をBSR1（第一の成長エンジン）、「新規ビジネスの創生・M&A・海外事業」をBSR2（第二の成長エンジン）と位置付けております。当連結会計年度においては、これらの音声認識ビジネスに人工知能などを付加し価値を増幅させたBSR（超音声認識）ビジネスに進化させていくことで、当社グループ全体での営業利益の黒字化を実現し、今後の継続的な増収増益を実現するスタートの期と位置付けておりました。

そのような中、働き方改革の推進、労働人口の減少等から、各企業における生産性向上・業務効率化への意識が高まりました。そのような背景のもと、当社のコア技術である「AI音声認識」（AIにより認識精度などが向上した音声認識：AmiVoice®）や「音声AI」（音声認識を含む音声処理を前提としたAI技術：AmiAgent®）の利用が好調に推移いたしました。その結果、対前期比で、BSR1は売上高34.1%増、営業利益8.8倍の大幅な増益、BSR2は売上高78.3%増、営業利益では赤字幅を大幅に縮小し、当社グループ全体での営業利益の黒字化を実現し、増収増益のスタートを切ることができました。

経営成績に重要な影響を与える要因について

音声認識分野にGoogle、Apple、Amazonなどの欧米系巨大企業が参入し、市場競争が活発化する中での収益拡大が重要になります。その鍵は音声認識（ASR）から超音声認識（BSR：Beyond Speech Recognition）への進化であります。BSRとは従来のASR（UI：ユーザーインターフェース）に人工知能などを付加し、生産性あるいは品質の向上というユーザーにとっての価値を増幅させたUI/UX（顧客体験：ユーザーエクスペリエンス）のことを言います。また、当社グループは巨大企業が提供する汎用型の音声認識ではなく、長年の経験、ノウハウとデータの蓄積に裏付けされた、領域特化型高精度・BSRにより市場競争に勝ち、収益拡大を行っていきます。

一方で、想定通り市場導入/展開ができず、想定していた以上の期間を要する可能性もあります。

その他の要因については、「2 事業等のリスク」を参照ください。

資本の財源及び資金の流動性についての分析

当社グループの当連結会計年度末の現金及び現金同等物の残高は前連結会計年度末に比べ808百万円増加し、4,237百万円となりました。

当連結会計年度においては、営業利益の黒字化により営業活動によるキャッシュ・フローも黒字化し、営業キャッシュ・フローを生み出す財務体質への改善が進みました。今後も営業利益率を向上させることで、さらなる財務体質の改善を進めてまいります。

当社グループは流動性かつ安全性の高い現金及び預金を有しており、事業活動を推進する上で当面の必要な資金は既に確保しています。

4【経営上の重要な契約等】

(1) 技術受入契約

第20期以前からの重要契約

契約会社名	相手方の名称	契約書名	契約内容	契約期間
(株)アドバンスト・メディア (当社)	Multimodal Technologies, LLC	Development and Cross License Agreement (DCLA) (開発及びクロスライセンス契約)	Multimodal Technologies, LLC (以下「MTL社」)の音声認識技術を組み込んだ日本語音声認識の製品・サービスを独占的に作成・販売(サブライセンス等による間接的な販売形態を含む。)する権利を、当社に付与する契約。	平成15年2月20日から平成30年3月31日。以後、1年毎の自動更新。
(株)アドバンスト・メディア (当社)	Multimodal Technologies, LLC	Supplemental Agreement (補足契約)	4,450千ドルを支払い、ソースコードの開示を受け、改変権を獲得するとともに、MTL社から当社社員に対して同ソースコード利用のトレーニングの提供を受けるための契約。	平成18年7月4日から平成30年3月31日。以後、1年毎の自動更新。
(株)アドバンスト・メディア (当社)	Multimodal Technologies, LLC	SECOND SUPPLEMENTAL AGREEMENT (補足契約書2)	従前、日本語に限定されていた当社の開発権・販売権を多言語に拡大すると共に、地域制限を撤廃する。 また、従前は契約種類毎に異なっていたロイヤリティレートを同一にするとともに、そのレートをロイヤリティ累計額に応じ、低減する方式に変更する契約。 契約内容の変更にあたり、3,500千米ドルを対価として支払う。	平成23年4月1日から平成32年3月31日まで。
(株)アドバンスト・メディア (当社)	Multimodal Technologies, LLC	THIRD SUPPLEMENTAL AGREEMENT (補足契約書3)	向こう8ヶ年分のロイヤリティを本契約の締結と同時に、一括して定額で前払いするもの。	平成24年9月30日から平成32年9月30日まで。
(株)アドバンスト・メディア (当社)	Multimodal Technologies, LLC	FOURTH SUPPLEMENTAL AGREEMENT (補足契約書4)	ロイヤリティの払込済期間を平成37年9月30日までの5年間延長。	平成26年7月11日から平成37年9月30日まで。

第21期に締結した重要契約

該当事項はありません。

(2) その他の契約

該当事項はありません。

5【研究開発活動】

当社グループは、「HCI (Human Communication Integration) の実現」をビジョンに掲げ、人が機械に自然に意思を伝えられる「ソフトコミュニケーションの時代」を拓くべく、音声認識技術および有用な最先端技術について研究開発活動を行っております。

当連結会計年度においては、基礎技術においてディープラーニングの発展技術であるリカレントニューラルネットワークの実装による認識精度向上、多言語の音声認識精度向上について取り組みました。また、応用技術において、対話エージェント向け意図抽出エンジン開発、対話型情報入出力アプリケーション開発、について取り組みました。そして、各分野別に新規製品・サービスの開発、既存製品の機能向上および強化の開発について取り組みました。

当連結会計年度における研究開発活動の概要は、以下の通りであります。

ディープラーニングの発展技術であるリカレントニューラルネットワークを実装し、自然発話音声認識の認識精度向上を行いました。また、中国語、韓国語、英語の音声認識精度向上および適用範囲の拡大を行いました。

コールセンター向け音声認識クラウドサービスAmiVoice[®] Communication Suite Cloudやコールセンター向け音声認識統合ソリューションAmiVoice[®] Communication Suite3の機能強化を行いました。

ユーザーの話した言葉の意図を認識し理解する次世代型AI対話エンジンの強化を行いました。バーチャルキャラクターとの音声対話シナリオをユーザーが自由に作成し、相互利用することができる対話プラットフォーム「コミュクラフト」を開発しリリースしました。

スマートフォンの文字入力を音声で行う、iOS版音声入力キーボードアプリ「AmiVoice[®] SBx」を開発しリリースしました。

訪問医療・介護向けに、スマートフォンに話すだけで簡単に記録の作成・管理・共有が可能になる、クラウド型音声入力管理サービス「AmiVoice[®] iVoX Medical」を開発し販売を開始しました。

音声認識を活用して書き起こし業務を効率化できる書き起こし業務支援システム「AmiVoice[®] SpeechWriter」を開発し販売を開始いたしました。また、報道機関向けに、中継やインタビュー取材・記者会見など、即時性が求められる映像音声の文字化に特化した音声認識システム「AmiVoice[®] Recorder Lite」を開発し販売を開始しました。

建設業界に対して、建築図書保存/管理・配筋検査・配筋写真管理・建築仕上げ検査の各種現場での業務を効率化する建築工程管理のプラットフォームサービス「AmiVoice[®] スーパーインスペクションプラットフォーム (SIP)」を開発し、販売を開始しました。更に、AIによる内装仕上げ検査機能を付与した「AmiVoice[®] SIP-AI」も販売を開始しました。

連結子会社の株式会社グラモにおいて、家電制御装置である『iRemocon』と連携するスマートロック製品『Glamo Smart Lock』を開発しました。

この結果、当連結会計年度の一般管理費に含まれている研究開発費は394百万円となりました。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当連結会計年度の設備投資等の総額は227,363千円であり、主にサーバーの購入、ソフトウェアの取得によるものであります。

2【主要な設備の状況】

提出会社

平成30年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額(千円)			従業員数 (人)
			建物	その他	合計	
本社 (東京都豊島区)	音声事業	本社機能	6,602	40,943	47,545	143

(注) 1. 現在休止中の主要な設備はありません。

2. 上記の他、主要な設備のうち連結会社以外から賃借している設備の内容は、以下のとおりであります。

事業所名 (所在地)	セグメントの名称	設備の内容	年間リース料 (千円)	リース契約残高 (千円)
本社 (東京都豊島区)	音声事業	本社事務所	64,225	117,747

3【設備の新設、除却等の計画】

(1) 重要な設備の新設等

当社グループの設備投資については、景気動向、事業の伸展、投資効率等を総合的に勘案し、機動的に策定いたしております。なお、当連結会計年度末現在における重要な設備の新設計画はありません。

(2) 重要な設備の除却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	35,800,000
計	35,800,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成30年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成30年6月29日)	上場金融商品取引 所名又は登録認可 金融商品取引業協 会名	内容
普通株式	15,929,405	17,035,524	(株)東京証券取引所 (マザーズ)	単元株式数 100株
計	15,929,405	17,035,524	-	-

(注) 「提出日現在発行数」欄には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの新株予約権の権利行使により発行された株式数は含まれておりません。

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

会社法に基づき発行した新株予約権は、次のとおりであります。

株式会社アドバンスト・メディア第3回新株予約権（平成25年5月10日取締役会決議）

	事業年度末現在 (平成30年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成30年5月31日)
新株予約権の数(個)	90	74
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	-	-
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株) (注)1	2,520,000	2,072,000
新株予約権の行使時の払込金額(円) (注)2	1,780	同左
新株予約権の行使期間	自平成25年5月27日 至平成31年5月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額	発行価格 1,797円 資本組入額 899円	同左
新株予約権の行使の条件	(注)3	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	(注)4	同左
代用払込みに関する事項	-	-
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	-	-

(注)1.(1)本新株予約権の目的となる株式の種類は当社普通株式とし、その総数は、25,200株とする。(本新株予約権1個の行使請求により当社が当社普通株式を新たに発行又はこれに代えて当社の保有する当社普通株式を処分(以下、当社普通株式の発行又は処分を「交付」という。)する数(以下、「交付株式数」という。)は、280株とする。)

ただし、(2)~(3)により交付株式数が調整される場合には、本新株予約権の目的となる株式の総数も調整後交付株式数に応じて調整されるものとする。

(2)当社が注2(3)の規定に従って、行使価額(注2(2)に定義する。)の調整を行う場合には、交付株式数は次の算式により調整される。ただし、調整の結果生じる1株未満の端数は切り捨てるものとする。

$$\text{調整後交付株式数} = \frac{\text{調整前交付株式数} \times \text{調整前行使価額}}{\text{調整後行使価額}}$$

上記算式における調整前行使価額及び調整後行使価額は、注2(3)に定める調整前行使価額及び調整後行使価額とする。

(3)調整後交付株式数の適用日は、当該調整事由に係る注2(3)及びによる行使価額の調整に関し、各調整事由毎に定める調整後行使価額を適用する日と同日とする。

(4)交付株式数の調整を行うときは、当社は、調整後交付株式数の適用開始日の前日までに、本新株予約権の新株予約権者に対し、かかる調整を行う旨並びにその事由、調整前交付株式数、調整後交付株式数及びその適用開始日その他必要な事項を書面で通知する。ただし、適用開始日の前日までに上記通知を行うことができない場合には、適用開始日以降速やかにこれを行う。

2.(1)本新株予約権の行使に際して出資される財産は金銭とし、その価額は、行使価額(以下に定義する。)に当該行使に係る本新株予約権の交付株式数を乗じた額とする。

(2)本新株予約権の行使により、当社が当社普通株式を交付する場合における株式1株当たりの出資される財産の価額(以下、「行使価額」という。)は、178,000円とする。ただし、行使価額は以下(3)の定めるところに従い調整されるものとする。

(3) 行使価額の調整

当社は、当社が本新株予約権の発行後、以下に掲げる各事由により当社の発行済普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生ずる可能性がある場合は、次に定める算式（以下、「行使価額調整式」という。）をもって行使価額を調整する。

$$\text{調整後行使価額} = \text{調整前行使価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{交付株式数} \times 1 \text{株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行株式数} + \text{交付株式数}}$$

行使価額調整式により行使価額の調整を行う場合及びその調整後の行使価額の適用時期については、次に定めるところによる。

(イ) 以下（ロ）に定める時価を下回る払込金額をもって当社普通株式を新たに発行し、又は当社の保有する当社普通株式を処分する場合（ただし、当社の発行した取得条項付株式、取得請求権付株式若しくは取得条項付新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）の取得と引換えに交付する場合又は当社普通株式の交付を請求できる新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券若しくは権利の転換、交換又は行使による場合を除く。）

調整後の行使価額は、払込期日（募集に際して払込期間が設けられたときは当該払込期間の最終日とする。以下、同じ。）の翌日以降又はかかる発行若しくは処分につき株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合はその日の翌日以降これを適用する。

(ロ) 当社普通株式の株式分割又は当社普通株式の無償割当てにより当社普通株式を発行する場合

調整後の行使価額は、株式分割のための株主割当日の翌日以降、当社普通株式の無償割当ての効力発生日の翌日以降、これを適用する。ただし、当社普通株式の無償割当てについて、当社普通株式の株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合は、その日の翌日以降これを適用する。

(ハ) 以下（ロ）に定める時価を下回る払込金額をもって当社普通株式の交付と引換えに当社に取得され若しくは取得を請求できる証券又は当社普通株式の交付を請求できる新株予約権若しくは新株予約権付社債を発行（無償割当ての場合を含む。）する場合

調整後の行使価額は、発行される取得請求権付株式、新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券又は権利（以下、「取得請求権付株式等」という。）の全てが当初の条件で転換、交換又は行使され、当社普通株式が交付されたものとみなして行使価額調整式を適用して算出するものとし、当該取得請求権付株式等の払込期日（新株予約権が無償にて発行される場合は割当日）以降、又は無償割当てのための基準日がある場合はその日（基準日を定めない場合には効力発生日）の翌日以降これを適用する。

上記にかかわらず、転換、交換又は行使に対して交付される当社普通株式の対価が取得請求権付株式等が発行された時点で確定していない場合は、調整後の行使価額は、当該対価の確定時点で発行されている取得請求権付株式等の全てが当該対価の確定時点の条件で転換、交換又は行使され当社普通株式が交付されたものとみなして行使価額調整式を準用して算出するものとし、当該対価が確定した日の翌日以降これを適用する。

(ニ) 上記(イ)～(ハ)の各取引において、当社普通株式の株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日が設定され、かつ、無償割当ての効力の発生が当該基準日以降の株主総会、取締役会その他当社の機関の承認を条件としているときには、調整後の行使価額は、当該承認があった日の翌日以降これを適用するものとする。

この場合において、当該基準日の翌日から当該取引の承認があった日までに本新株予約権を行使した新株予約権者に対しては、次の算出方法により当社普通株式を交付する。この場合、1株未満の端数は切り捨て、現金による調整は行わない。

$$\text{株式数} = \frac{(\text{調整前行使価額} - \text{調整後行使価額}) \times \text{調整前行使価額により当該期間内に交付された株式数}}{\text{調整後行使価額}}$$

行使価額調整式により算出された調整後の行使価額と調整前の行使価額との差額が1円未満に留まる限りは、行使価額の調整はこれを行わない。ただし、その後行使価額の調整を必要とする事由が発生し、行使価額を調整する場合には、行使価額調整式中の調整前行使価額に代えて調整前行使価額からこの差額を差し引いた額を使用する。

- (イ) 行使価額調整式の計算については、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。
- (ロ) 行使価額調整式で使用する時価は、調整後の行使価額が初めて適用される日に先立つ45取引日目に始まる30取引日の東京証券取引所における当社普通株式の普通取引の毎日の終値の平均値（終値のない日数を除く。気配値表示を含む。）とする。この場合、平均値の計算は、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。
- (ハ) 行使価額調整式で使用する既発行株式数は、株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合はその日、また、かかる基準日がない場合は、調整後の行使価額を初めて適用する日の1ヶ月前の日における当社の発行済普通株式数から、当該日において当社の保有する当社普通株式を控除した数とする。

上記(3)の行使価額の調整を必要とする場合以外にも、次に掲げる場合には、当社は、本新株予約権者（本新株予約権を保有する者をいう。以下、同じ。）と協議の上、その承認を得て、必要な行使価額の調整を行う。

- (イ) 株式の併合、資本金の減少、合併、会社法第762条第1項に定められた新設分割、会社法第757条に定められた吸収分割、株式交換又は株式移転のために行使価額の調整を必要とするとき。
 - (ロ) その他当社の発行済普通株式数の変更又は変更の可能性が生じる事由の発生により行使価額の調整を必要とするとき。
 - (ハ) 当社普通株式の株主に対する他の種類の株式の無償割当てのために行使価額の調整を必要とするとき。
- (二) 行使価額を調整すべき複数の事由が相接して発生し、一方の事由に基づく調整後の行使価額の算出に当たり使用すべき時価につき、他方の事由による影響を考慮する必要があるとき。

上記(3)～により行使価額の調整を行うときには、当社は、あらかじめ書面によりその旨並びにその事由、調整前の行使価額、調整後の行使価額及びその適用開始日その他必要な事項を当該適用開始日の前日までに本新株予約権者に通知する。ただし、適用開始日の前日までに上記通知を行うことができない場合には、適用開始日以降速やかにこれを行う。

3. 新株予約権行使の条件

- (1) 本新株予約権の行使によって、当社の発行済株式総数が当該時点における授權株式数を超過することとなるときは、当該本新株予約権の行使を行うことはできない。
- (2) 各本新株予約権の一部行使はできない。

4. 新株予約権の譲渡に関する事項

本新株予約権の譲渡については、当社取締役会の承認を要するものとする。

- 5. 平成25年10月1日付にて実施した株式分割（1株を100株に分割）に伴い、新株予約権の目的となる株式の数等を調整しております。

会社法に基づき発行した新株予約権付社債は、次のとおりであります。

株式会社アドバンスト・メディア第1回無担保転換社債型新株予約権付社債
(平成25年5月10日取締役会決議)

	事業年度末現在 (平成30年3月31日)	提出日の前月末現在 (平成30年5月31日)
新株予約権付社債の残高(千円)	770,000	-
新株予約権の数(個)	22	-
新株予約権のうち自己新株予約権の数(個)	-	-
新株予約権の目的となる株式の種類	普通株式	同左
新株予約権の目的となる株式の数(株)(注)1	658,119	-
新株予約権の行使時の払込金額(円)(注)2	1,170	同左
新株予約権の行使期間(注)3	自平成25年5月27日 至平成31年5月26日	同左
新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式の発行価格及び資本組入額(円)	(注)4	同左
新株予約権の行使の条件	各本新株予約権の一部行使はできない。(注)5	同左
新株予約権の譲渡に関する事項	本新株予約権付社債は会社法第254条第2項本文及び第3項本文の定めにより本社債又は本新株予約権のうち一方のみを譲渡することはできない。また、本新株予約権付社債の譲渡には当社取締役会の承認を要するものとする。	同左
代用払込みに関する事項	本新株予約権の行使に際して出資される財産は、当該本新株予約権に係る本社債とし、当該社債の価額はその払込金額と同額とする。	同左
組織再編成行為に伴う新株予約権の交付に関する事項	-	-

(注)1. 本新株予約権の目的となる株式の総数は、本社債の元本総額を下記(注)2(2)記載の転換価額(転換価額調整事由が発生した場合は調整後転換価額)で除して得られる最大整数とする。

本新株予約権の行使請求により当社が当社普通株式を新たに発行し又はこれに代えて当社の保有する当社普通株式を処分(以下、当社普通株式の発行又は処分を「交付」という。)する数は、行使請求に係る本新株予約権に係る本社債の払込金額の総額を転換価額(転換価額調整事由が発生した場合は調整後転換価額)で除して得られる最大整数とする。

ただし、行使により生じる1株未満の端数は切り捨て、現金による調整は行わない。

2.(1) 本新株予約権の行使に際して出資される財産は、当該本新株予約権に係る本社債とし、当該社債の価額はその払込金額と同額とする。

(2) 本新株予約権の行使により交付する当社普通株式の数を算定するに当たり用いられる1株当たりの額(以下、「転換価額」という。)は、1株につき117,000円とする。

(3) 転換価額の調整

当社は、当社が本新株予約権付社債の発行後、本欄に掲げる各事由により当社の発行済普通株式数に変更を生じる場合又は変更を生ずる可能性がある場合は、次に定める算式(以下、「転換価額調整式」という。)をもって転換価額を調整する。

$$\text{調整後転換価額} = \text{調整前転換価額} \times \frac{\text{既発行株式数} + \frac{\text{交付株式数} \times 1 \text{株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行株式数} + \text{交付株式数}}$$

転換価額調整式により転換価額の調整を行う場合及びその調整後の転換価額の適用時期については、次に定めるところによる。

- (イ) 本欄 口に定める時価を下回る払込金額をもって当社普通株式を新たに発行し、又は当社の保有する当社普通株式を処分する場合（ただし、当社の発行した取得条項付株式、取得請求権付株式若しくは取得条項付新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）の取得と引換えに交付する場合又は当社普通株式の交付を請求できる新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券若しくは権利の転換、交換又は行使による場合を除く。）調整後の転換価額は、払込期日（募集に際して払込期間が設けられたときは当該払込期間の最終日とする。以下、同じ。）の翌日以降又はかかる発行若しくは処分につき株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合はその日の翌日以降これを適用する。
- (ロ) 当社普通株式の株式分割又は当社普通株式の無償割当てにより当社普通株式を発行する場合調整後の転換価額は、株式分割のための株主割当日の翌日以降、当社普通株式の無償割当ての効力発生日の翌日以降、これを適用する。ただし、当社普通株式の無償割当てについて、当社普通株式の株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合は、その日の翌日以降これを適用する。
- (ハ) 本欄 口に定める時価を下回る払込金額をもって当社普通株式の交付と引換えに当社に取得され若しくは取得を請求できる証券又は当社普通株式の交付を請求できる新株予約権若しくは新株予約権付社債を発行（無償割当ての場合を含む。）する場合調整後の転換価額は、発行される取得請求権付株式、新株予約権（新株予約権付社債に付されたものを含む。）その他の証券又は権利（以下、「取得請求権付株式等」という。）の全てが当初の条件で転換、交換又は行使され、当社普通株式が交付されたものとみなして転換価額調整式を適用して算出するものとし、当該取得請求権付株式等の払込期日（新株予約権が無償にて発行される場合は割当日）以降、又は無償割当てのための基準日がある場合はその日（基準日を定めない場合には効力発生日）の翌日以降これを適用する。
上記にかかわらず、転換、交換又は行使に対して交付される当社普通株式の対価が取得請求権付株式等が発行された時点で確定していない場合は、調整後の転換価額は、当該対価の確定時点で発行されている取得請求権付株式等の全てが当該対価の確定時点の条件で転換、交換又は行使され当社普通株式が交付されたものとみなして転換価額調整式を準用して算出するものとし、当該対価が確定した日の翌日以降これを適用する。
- (ニ) 上記(イ)～(ハ)の各取引において、当社普通株式の株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日が設定され、かつ、無償割当ての効力の発生が当該基準日以降の株主総会、取締役会その他当社の機関の承認を条件としているときには、調整後の転換価額は、当該承認があった日の翌日以降これを適用するものとする。
この場合において、当該基準日の翌日から当該取引の承認があった日までに本新株予約権を行使した新株予約権者に対しては、次の算出方法により当社普通株式を交付する。この場合、1株未満の端数は切り捨て、現金による調整は行わない。

$$\text{株式数} = \frac{(\text{調整前転換価額} - \text{調整後転換価額}) \times \text{調整前転換価額により当該期間内に交付された株式数}}{\text{調整後転換価額}}$$

転換価額調整式により算出された調整後の転換価額と調整前の転換価額との差額が1円未満に留まる限りは、転換価額の調整はこれを行わない。ただし、その後転換価額の調整を必要とする事由が発生し、転換価額を調整する場合には、転換価額調整式中の調整前転換価額に代えて調整前転換価額からこの差額を差し引いた額を使用する。

- (イ) 転換価額調整式の計算については、円位未満小数第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。
- (ロ) 転換価額調整式で使用する時価は、調整後の転換価額が初めて適用される日に先立つ45取引日目に始まる30取引日の東京証券取引所における当社普通株式の普通取引の毎日の終値の平均値（終値のない日数を除く。気配値表示を含む。）とする。この場合、平均値の計算は、円位未満小数

第2位まで算出し、小数第2位を四捨五入する。

(ハ) 転換価額調整式で使用する既発行株式数は、株主に割当てを受ける権利を与えるための基準日がある場合はその日、また、かかる基準日がない場合は、調整後の転換価額を初めて適用する日の1ヶ月前の日における当社の発行済普通株式数から、当該日において当社の保有する当社普通株式を控除した数とする。

上記(3)の転換価額の調整を必要とする場合以外にも、次に掲げる場合には、当社は、本社債権者と協議の上、その承認を得て、必要な転換価額の調整を行う。

(イ) 株式の併合、資本金の減少、合併、会社法第762条第1項に定められた新設分割、会社法第757条に定められた吸収分割、株式交換又は株式移転のために転換価額の調整を必要とするとき。

(ロ) その他当社の発行済普通株式数の変更又は変更の可能性が生じる事由の発生により転換価額の調整を必要とするとき。

(ハ) 当社普通株式の株主に対する他の種類の株式の無償割当てのために転換価額の調整を必要とするとき。

(ニ) 転換価額を調整すべき複数の事由が相接して発生し、一方の事由に基づく調整後の転換価額の算出に当たり使用すべき時価につき、他方の事由による影響を考慮する必要があるとき。

上記(3)～により転換価額の調整を行うときには、当社は、あらかじめ書面によりその旨並びにその事由、調整前の転換価額、調整後の転換価額及びその適用開始日その他必要な事項を当該適用開始日の前日までに本新株予約権付社債の社債権者に通知する。ただし、適用開始日の前日までに上記通知を行うことができない場合には、適用開始日以降速やかにこれを行う。

3. 当社は、本新株予約権付社債の発行後、償還期限までの期間、その選択により、本新株予約権付社債の社債権者に対して、償還すべき日の2週間以上前に事前通知を行った上で、当該繰上償還日に、以下に記載の割合を残存する本新株予約権付社債の全部又は一部の額面金額に乗じた金額で繰上償還することができる。一部を償還する場合は、抽選その他の合理的な方法による。

平成25年5月27日から平成26年5月26日までの期間：101.5%

平成26年5月27日から平成27年5月26日までの期間：103.0%

平成27年5月27日から平成28年5月26日までの期間：104.5%

平成28年5月27日から平成29年5月26日までの期間：106.0%

平成29年5月27日から平成30年5月26日までの期間：107.5%

平成30年5月27日から平成31年5月26日までの期間：109.0%

4. (1) 新株予約権の行使により株式を発行する場合の株式1株の発行価格

本新株予約権の行使により発行する当社普通株式1株の発行価格は、注2(2)記載の転換価額(転換価額調整事由が発生した場合は調整後転換価額)とする。

(2) 新株予約権の行使により株式を発行する場合における増加する資本金及び資本準備金

本新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本金の額は、会社計算規則第17条の規定に従い算出される資本金等増加限度額の2分の1の金額とし、計算の結果1円未満の端数が生じる場合はその端数を切り上げた金額とする。また、本新株予約権の行使により株式を発行する場合において増加する資本準備金の額は、当該資本金等増加限度額から増加する資本金の額を減じて得た額とする。

5. 当社が第3回新株予約権の発行要項の規定に基づいて第3回新株予約権を取得する場合又は以下のいずれかの事象が発生した日以降いつでも、割当先の業務執行組合員であるウィズ・パートナーズ(以下、「ウィズ・パートナーズ」という。)は当社に対して書面をもって通知することにより、割当予定先が保有する残存する本新株予約権付社債の全部又は一部を、注3の規定に準じて繰上償還するよう請求することができる。

(1) 当社普通株式の上場廃止又はその決定

(2) 投資契約の当社による重大な違反があった場合

(3) 投資契約の当社による軽微な違反について、ウィズ・パートナーズから是正を求める通告があり、2週間以内に違反状態が改善されない場合

(4) 公開買付に関する、ウィズ・パートナーズの事前承諾のない当社の賛同意見表明

6. 平成25年10月1日付にて実施した株式分割(1株を100株に分割)に伴い、新株予約権の目的となる株式の数等を調整しております。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】
該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式総 数増減数 (株)	発行済株式総 数残高(株)	資本金増減額 (千円)	資本金残高 (千円)	資本準備金増 減額(千円)	資本準備金残 高(千円)
平成25年5月1日～ 平成25年6月30日 (注)1	220	152,822	11,000	4,596,097	11,000	3,062,797
平成25年10月1日 (注)2	15,129,378	15,282,200	-	4,596,097	-	3,062,797
平成25年12月1日～ 平成25年12月31日 (注)1	12,000	15,294,200	6,000	4,602,097	6,000	3,068,797
平成26年3月25日 (注)3	628,205	15,922,405	367,500	4,969,597	367,500	3,436,297
平成26年6月1日～ 平成26年6月30日 (注)1	7,000	15,929,405	3,500	4,973,097	3,500	3,439,797

(注)1 平成25年4月1日～平成26年6月30日における新株予約権の権利行使による増加

2 株式分割(1:100)による増加であります。

3 転換社債の転換によるものであります。

4 平成30年4月1日～平成30年5月31日における無担保転換社債型新株予約権付社債の行使及び、新株予約権の権利行使による増加

発行株式数 1,106,119株

発行総額 1,575,056千円

資本組入額 787,752千円

(5) 【所有者別状況】

平成30年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							計	単元未満株 式の状況
	政府及び地 方公共団体	金融機関	金融商品取 引業者	その他の法 人	外国法人等		個人その他		
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	4	40	107	29	22	12,384	12,586	-
所有株式数 (単元)	-	4,740	8,845	30,379	14,442	217	100,640	159,263	3,105
所有株式の 割合(%)	-	2.976	5.553	19.074	9.068	0.136	63.191	100.00	-

(注)「その他の法人」の欄には、証券保管振替機構名義の株式が、1単元含まれております。

(6) 【大株主の状況】

平成30年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
(株)サン・クロレラ	京都府京都市下京区烏丸通五条下る大坂町369番地	1,250,000	7.85
ウィズ・アジア・エボリューションファンド投資事業有限責任組合	東京都港区愛宕2丁目5番1号	628,205	3.94
(株)BSR	千葉県浦安市	560,000	3.52
ゴールドマン・サックス・インターナショナル (常任代理人 ゴールドマン・サックス証券(株))	133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB 東京都港区六本木6丁目10番1号	484,918	3.04
鈴木清幸	千葉県浦安市	472,400	2.97
バンク オブ ニューヨーク ジーシーエム クライアント アカウント ジェイピーアールデイ アイエスジー エフイー-エイシー (常任代理人 (株)三菱東京UFJ銀行)	PETERBOROUGH COURT 133 FLEET STREET LONDON EC4A 2BB 東京都千代田区丸の内2丁目7番1号	343,082	2.15
村上青史	宮城県仙台市青葉区	292,300	1.83
資産管理サービス信託銀行(株)	東京都中央区晴海1丁目8番12号	254,900	1.60
松井証券(株)	東京都千代田区麹町1丁目4番	202,700	1.27
東邦ホールディングス(株)	東京都世田谷区代沢5丁目2番1号	162,000	1.02
計	-	4,650,505	29.19

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

平成30年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 100	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 15,926,200	159,262	-
単元未満株式	普通株式 3,105	-	-
発行済株式総数	15,929,405	-	-
総株主の議決権	-	159,262	-

【自己株式等】

平成30年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有株式数(株)	他人名義所有株式数(株)	所有株式数の合計(株)	発行済株式総数に対する所有株式数の割合(%)
(自己株式) 株式会社アドバンスト・メディア	東京都豊島区東池袋三丁目1番4号	100	-	100	0.00
計	-	100	-	100	0.00

2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2)【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	25	47,450
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における取得自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4)【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他(-)	-	-	-	-
保有自己株式数	100		100	

(注) 当期間における保有自己株式数には、平成30年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3【配当政策】

当社は、株主の皆様に対する適正な利益配分が会社の果たすべき重要な使命と認識しておりますが、剰余金の配当については財務体質の改善及び音声認識事業を中心とした戦略的先行投資のための内部留保の充実、並びに業績等の状況も含めて総合的に勘案し、実施していくことを基本方針としております。

当社の配当の決定機関は、期末配当については株主総会、中間配当については取締役会であります。

当社グループの事業展開が計画通りに進展し、将来において十分な利益を計上した場合には、財務状況や継続的な事業成長を推進する研究開発活動のための内部留保とのバランスを勘案しながら、株主への利益配当を検討していく方針であります。

当社は、「取締役会の決議により、毎年9月30日を基準日として、中間配当を行うことができる。」旨を定款に定めております。

4【株価の推移】

(1)【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第17期	第18期	第19期	第20期	第21期
決算年月	平成26年3月	平成27年3月	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月
最高(円)	293,500 2,166	1,480	1,018	1,220	2,200
最低(円)	56,600 975	705	553	610	706

- (注) 1. 最高・最低株価は、(株)東京証券取引所マザーズにおけるものであります。
2. 印は、株式分割(平成25年10月1日、1株 100株)による権利落後の最高・最低価格を示しております。

(2)【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成29年10月	11月	12月	平成30年1月	2月	3月
最高(円)	1,126	1,469	1,944	2,029	2,060	2,200
最低(円)	845	908	1,311	1,711	1,517	1,696

- (注) 最高・最低株価は、(株)東京証券取引所マザーズにおけるものであります。

5【役員の状況】

男性 9名 女性 -名 (役員のうち女性の比率 -%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
代表取締役 会長兼社長		鈴木 清幸	昭和27年1月13日	昭和61年8月 ㈱インテリジェントテクノロジー入社 平成元年12月 同社常務取締役 平成9年12月 当社設立 代表取締役社長 平成13年11月 Multimodal Technologies, Inc 取締役 平成20年6月 当社代表取締役会長 平成22年2月 AMIVOICE THAI CO.,LTD.取締役 (現任) 平成22年6月 当社代表取締役会長兼社長(現任)	(注)3	472,400
常務取締役	経営管理本部長 兼ビジネス開発 センター長	立松 克己	昭和39年11月8日	平成15年7月 ㈱クリード入社 平成16年2月 同社総務部長 平成17年12月 当社入社 総務・人事部長 平成18年6月 当社取締役総務・人事部長 平成19年5月 当社取締役管理部長 平成24年4月 当社取締役経営管理部長 平成29年4月 当社取締役経営管理本部長兼ビ ジネス開発センター長 平成30年6月 当社常務取締役経営管理本部長 兼ビジネス開発センター長(現 任)	(注)3	1,200
取締役	SH事業部長兼海 外事業部長	藤田 泰彦	昭和35年4月28日	昭和60年4月 東洋エンジニアリング㈱入社 平成10年10月 当社入社 平成12年6月 当社取締役開発本部長 平成19年10月 当社取締役技術部長 平成20年9月 AMIVOICE THAI CO.,LTD.取締役 平成22年2月 Multimodal Technologies, Inc 取締役 平成22年2月 AMIVOICE THAI CO.,LTD.代表取 締役(現任) 平成22年5月 当社取締役技術本部長 平成24年4月 当社取締役情報システム部長兼 海外事業部長 平成26年4月 当社取締役情報システム部長 平成29年4月 当社取締役知財部長 平成30年4月 当社取締役SH事業部長 平成30年5月 当社取締役SH事業部長兼海外事 業部長(現任)	(注)3	20,000
取締役	事業本部長兼CTI 事業部長	大柳 伸也	昭和50年4月4日	平成20年9月 当社入社 平成26年4月 当社CTI事業部長 平成30年4月 当社事業本部長兼CTI事業部長 平成30年6月 当社取締役事業本部長兼CTI事 業部長(現任)	(注)3	-

6【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1)【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は上場企業としての責務を全うし、かつ企業価値増大の永続的な追求を可能とするため、強力なガバナンス体制の構築を目指してまいります。

その構築のため、以下の3つを重点項目と位置づけ取り組んでまいります。

- ・ディスクロージャーの充実

経営の透明性と健全性を確保するため、投資家に対して適時適切に情報を開示いたします。

- ・アカウントビリティーの徹底

当社のステークホルダーに対して、十分な説明責任を果たしてまいります。

- ・コンプライアンス

法令遵守にとどまらず、その趣旨及び精神を尊重し、コンプライアンス意識の醸成を図ってまいります。

企業統治の体制

イ. 企業統治の体制の概要

会社機関の基本説明

- ・取締役会

当社の取締役会は社外取締役2名を含む取締役6名で構成され、毎月1回開催を定例としつつ必要に応じ随時開催して、会社の重要な意思決定を行うとともに、取締役の職務の執行状況を監督しております。また法令・定款・取締役会規則に定める事項の他、経営に関する重要事項に関して幅広く報告、議論を行っております。

なお、当社の取締役は定款において10名以内と定数を定めております。

- ・監査役会

当社は監査役会設置会社であり、監査役1名と社外監査役2名(うち1名が常勤監査役)の計3名で構成され、毎月1回開催されております。各監査役は監査役会で決定した年間監査計画に基づき重要な会議に出席する他、業務及び各種書類や証憑の調査を通じ取締役の職務の執行状況を監査しております。

また、会計監査人や内部監査部門とも定期的な会合により、情報の共有化及び意見交換を行うこととしております。

- ・執行役員会

執行役員により構成され、原則月1回開催し、当社の事業全般に関する重要事項等について報告し、議論を行っております。

- ・執行役員

取締役会が決定する経営方針に従い、管掌する取締役の指示のもと、担当する部署あるいは業務について職務執行を行っております。

- ・内部監査室

内部監査につきましては、内部監査室長、内部監査室員1名にて監査を実施しております。経営方針や社内規程への適合性、また法令遵守の観点から各本部の業務を対象に監査を実施しております。

また、会計監査人や監査役会とも定期的な会合により、情報の共有化及び意見交換を行うこととしております。

・当社および当社子会社取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当社は、定例の取締役会を原則毎月1回開催するほか、適宜、臨時に開催し、法令、定款および社内規程に基づき重要事項の決定ならびに業務執行状況の管理および監督等を行う。

各取締役は役員規程および職務分掌規程等に基づき業務を執行しており、随時、必要な決定を行う。

また、当社グループの業務執行の効率性を高めるため、必要に応じて権限体系および決裁方法を見直し、当社子会社に当社の職務執行体制に準拠した体制を構築させる。

・当社および子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制

当社は子会社ごとに管理担当責任者を選任し、管理担当責任者は、関係会社管理規程に基づき、適宜、当社への決裁および報告を行う。また、当社グループは、定期的に当社グループ間の個別の会議や報告会を開催し、当社への報告を行う。さらに、当社は、当社の各担当部署および当社子会社が内部統制システムを整備するよう指導し、法令違反その他内部統制にかかわる重要事項を発見した場合は、直ちに当社の取締役および監査役に報告する。

・監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項ならびにその使用人の取締役からの独立性に関する事項

監査役会がその職務を補助する使用人を置くことを求めた場合には、当該使用人を配置するものとし、配置に当たっての具体的な内容（任命、異動、人事考課、賞罰等）については、監査役会の意見を尊重したうえで行うものとする。また、当該使用人については、取締役からの独立性を十分に確保する。当社は、監査役の職務を補助すべき使用人に関し、内部規程に沿って監査役の指揮命令に従うよう周知徹底を行うものとする。

・当社および当社子会社の取締役および使用人が監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制

取締役は、監査役が出席する取締役会等の会議において業務執行状況の報告を行う。当社グループの役職員は、当社または当社子会社に著しい損害を及ぼし、または発生する恐れがあるときおよび職務遂行に関する法令違反または不正な行為を発見したときは、直ちに監査役に報告することとする。また、監査役に報告を行った者について、当該報告をしたことを理由として不利益な取扱いを行うことを禁止し、不利益な取扱いを受けないよう、公益通報者保護法に基づく規程に基づき通報者等の保護を図ることとし、その旨を当社グループに周知徹底する。

監査役は、必要に応じて当社グループの役職員に対し業務執行に関する事項について報告を求めることができ、当社グループの役職員は、監査役から報告を求められたときは速やかに適切な報告を行う。

・その他監査役の監査が実効的に行われることを確保するための体制

監査役会の監査計画に基づき、監査が効率的かつ実効的に行えるよう、各部署の協力体制と内部監査部門との連携体制を構築する。

監査役会は、監査の実施のために必要なときは、自らの判断により外部の専門家を活用することができる。

監査役がその職務の執行について生ずる費用の前払い等の請求をしたときは、担当部署において協議の上、当該請求に係る費用または債務が当該監査役の職務の執行に必要でないと認められた場合を除き、速やかに当該費用または債務を処理する。

監査にかかる諸費用については、監査の実効性を担保すべく予算措置を行う。

・リスク管理体制の整備の状況

当社はリスク管理規程を定め、主に取締役および監査役から構成されるリスク管理委員会を定期的を開催することにより、当社が直面する可能性のあるリスクを識別すると共に予防策を講じている。

リスクその他の重要情報の適時開示を果たすため、取締役会は直ちに報告すべき重要情報の基準および開示基準を審議する。

重要な非通常の取引、重要な会計上の見積り、利益相反取引、子会社および関係会社との重要な取引等、当社に影響を及ぼす可能性のある事項については取締役会の決議を要する。

代表取締役、コンプライアンスおよびリスク管理担当役員は、コンプライアンスおよびリスク管理への取り組みや進捗状況等、適宜、取締役会に報告を行う。

・子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は、当社グループにおける業務の適正を確保するため、関係会社管理方針を策定し、関係会社運営の適正化、効率化を図っております。

二. 責任限定契約の内容の概要

当社と業務執行取締役等でない取締役及び監査役は、会社法第427条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は会社法第425条第1項に定める額としております。

内部監査及び監査役監査の状況

当社の内部監査は内部監査室長、内部監査室員1名にて期首に策定する内部監査計画に基づき実施されております。内部監査は業務執行の適正性及び統制活動の有効性の有無について、経営方針や社内規程への適合や法令遵守の観点から各本部を対象に実施しております。

また監査役監査は常勤監査役1名を含む監査役3名によって行われております。毎月1回監査役会を開催し、各監査役は監査役会で決定した年間監査計画に基づき、監査の状況を報告、共有しております。

内部監査室と監査役は定期的な会合により、情報の共有化及び意見交換を行うこととしております。

なお、監査役向川寿人氏は公認会計士の資格を有しており、監査役小林明隆氏は弁護士の資格を有しております。

会計監査の状況

会計監査につきましては、当社は監査法人アヴァンティアと監査契約を締結し、会社法監査及び金融商品取引法監査を受けております。会計監査人は独立する第三者としての立場から、財務諸表監査を実施し、当社は、監査結果の報告を受けて、内部統制等の検討課題等についても適宜意見を交換し、改善事項等の助言を受けております。なお、当期において業務を執行した公認会計士の氏名、監査業務に係る補助者の構成は次のとおりであります。

代表社員 業務執行社員 小笠原 直
代表社員 業務執行社員 木村 直人
監査業務に係る補助者の構成 公認会計士6名、その他4名

社外取締役及び社外監査役

当社の社外取締役は2名、社外監査役は2名であります。

社外取締役飯野智氏は株式会社ウィズ・パートナーズのファンド事業CIO兼投資運用部長を兼務しており、社外取締役片山龍太郎氏は同社の顧問を兼務しております。同社は当社と平成25年5月10日付で投資契約書を締結し、当社は、同社が業務執行組員であるウィズ・アジア・エボリューション・ファンド投資事業有限責任組合に対し、無担保転換社債型新株予約権付社債および新株予約権の割り当てを行っております。

社外監査役である石川紘次氏は、当事業年度末（平成30年3月31日）現在で当社株式9,000株を保有しております。

社外監査役向川寿人氏と当社の間で、特別な取引関係その他の利害関係はありません。

社外取締役および社外監査役は企業統治の観点から、独立性を有するべきとの前提のもと、外部からのモニタリングによる経営の効率化、経営監視機能の強化および事業運営における透明性の向上に寄与していると判断し、現在の選任状況が、当該役割を有効に機能させるうえで、適正であると認識しております。

なお、当社では社外取締役又は社外監査役を選任するための独立性に関する基準又は方針は定めておりませんが、東京証券取引所の有価証券上場規程施行規則等を参考にして、独立性を判断し、選任しております。

会計監査人、内部監査室とも定期的な会合により、情報の共有化及び意見交換を行うこととしております。

なお、当社と社外取締役及び監査役は、会社法第427条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は会社法第425条第1項に定める額としております。

役員報酬等

() 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (千円)	報酬等の種類別の総額(千円)				対象となる 役員の員数 (人)
		基本報酬	ストックオプション	賞与	退職慰労金	
取締役 (社外取締役を除く。)	21,625	21,625	-	-	-	5
監査役 (社外監査役を除く。)	1,800	1,800	-	-	-	1
社外役員	9,300	9,300	-	-	-	2

() 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

当社の役員の報酬等の額又はその算定方針の決定に関する方針は、当社の業績、役員個々の功績及び経済情勢等を総合的に斟酌し、公正かつ客観的に判断した上で、取締役については取締役会、監査役については監査役会で決定することとしております。

株式の保有状況

イ. 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

5 銘柄 345,048千円

ロ. 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的

前事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
(株)コラボス	37,400	113,883	協業・ビジネス開発(CTI分野)を推進する戦略的な目的

当事業年度

特定投資株式

銘柄	株式数(株)	貸借対照表計上額 (千円)	保有目的
(株)コラボス	112,200	132,508	協業・ビジネス開発(CTI分野)を推進する戦略的な目的

取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を定款に定めております。

株主総会の特別決議要件

当社は会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

自己の株式の取得

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議をもって、自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。これは、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策の遂行を可能とするため、市場取引等により自己の株式を取得することができることを目的とするものであります。

剰余金の配当の決定機関

当社は、資本政策の機動性を確保するため、取締役会の決議により、会社法第454条第5項に定める剰余金の配当(中間配当)をすることができる旨を定款に定めております。

取締役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する取締役(取締役であった者を含む。)の責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、取締役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

監査役の責任免除

当社は、会社法第426条第1項の規定により、取締役会の決議をもって同法第423条第1項の行為に関する監査役(監査役であった者を含む。)の責任を法令の限度において免除することができる旨定款に定めております。これは、監査役が職務を遂行するにあたり、その能力を十分に発揮して、期待される役割を果たしうる環境を整備することを目的とするものであります。

(2) 【 監査報酬の内容等】

【 監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)	監査証明業務に基づく報酬(千円)	非監査業務に基づく報酬(千円)
提出会社	20,000	-	20,000	-
連結子会社	-	-	-	4,812
計	20,000	-	20,000	4,812

【その他重要な報酬の内容】

該当事項はありません。

【 監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

該当事項はありません。

【 監査報酬の決定方針】

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬の決定方針としましては、予定される監査業務の日数、監査業務に係る人員数、当社監査に係る業務量等を総合的に勘案し、監査公認会計士と協議の上、決定しております。

第5【経理の状況】

1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)の連結財務諸表及び事業年度(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)の財務諸表について、監査法人アヴァンティアによる監査を受けております。

3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、適時に当社グループの財務内容を開示できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し会計基準、適用指針、実務対応報告、ディスクロージャー制度等に関する敏速な情報収集と当社グループの開示内容への適用についての検討を随時行っております。

また社外セミナー・研修への積極的な参加を通じて、担当人員がより高度な業務遂行能力を習得するように自己啓発を促しております。

1【連結財務諸表等】

(1)【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,545,058	4,341,883
受取手形及び売掛金	975,453	1,119,590
電子記録債権	7,023	18,525
商品及び製品	53,923	77,075
仕掛品	17,750	10,176
原材料及び貯蔵品	29,869	26,318
未収入金	4,743	3,196
その他	75,228	109,165
貸倒引当金	5,217	4,403
流動資産合計	4,703,832	5,701,528
固定資産		
有形固定資産		
建物		
減価償却累計額	38,848	39,893
減損損失累計額	32,655	32,655
建物(純額)	7,091	6,602
その他		
減価償却累計額	135,502	143,705
減損損失累計額	12,567	11,348
その他(純額)	43,041	46,552
有形固定資産合計	50,133	53,155
無形固定資産		
ソフトウェア	230,743	268,008
ソフトウェア仮勘定	35,874	42,779
のれん	9,275	5,565
その他	115	115
無形固定資産合計	276,010	316,468
投資その他の資産		
投資有価証券	636,799	619,479
敷金及び保証金	85,966	86,556
長期前払費用	328,940	282,597
その他	124,777	152,933
投資その他の資産合計	1,176,484	1,141,566
固定資産合計	1,502,628	1,511,190
資産合計	6,206,460	7,212,718

(単位：千円)

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	135,192	77,976
短期借入金	-	33,335
1年内返済予定の長期借入金	-	2,912
未払金	72,481	119,145
未払法人税等	30,922	126,089
前受金	129,908	198,038
その他	62,231	179,322
流動負債合計	430,737	736,819
固定負債		
社債	770,000	770,000
繰延税金負債	31,622	46,754
長期借入金	-	147,088
資産除去債務	7,545	7,682
固定負債合計	809,167	971,524
負債合計	1,239,905	1,708,344
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,973,097	4,973,097
資本剰余金	3,982,452	3,982,452
利益剰余金	4,306,895	3,784,635
自己株式	102	149
株主資本合計	4,648,552	5,170,765
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	71,630	105,950
為替換算調整勘定	15,527	869
その他の包括利益累計額合計	56,102	106,819
新株予約権	52,204	42,840
非支配株主持分	209,696	183,949
純資産合計	4,966,555	5,504,374
負債純資産合計	6,206,460	7,212,718

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	2,581,028	3,683,329
売上原価	918,605	1,026,831
売上総利益	1,662,422	2,656,498
販売費及び一般管理費	1, 2 1,740,082	1, 2 2,008,515
営業利益又は営業損失()	77,659	647,982
営業外収益		
受取利息	21,925	25,245
投資事業組合運用益	-	45,787
業務受託手数料	-	3,789
雑収入	2,775	3,866
営業外収益合計	24,700	78,688
営業外費用		
支払利息	-	768
支払手数料	450	-
持分法による投資損失	8,303	10,185
為替差損	42,395	104,331
投資事業組合運用損	6,715	-
雑損失	7,764	823
営業外費用合計	65,629	116,108
経常利益又は経常損失()	118,588	610,562
特別利益		
新株予約権戻入益	-	9,364
特別利益合計	-	9,364
特別損失		
固定資産除却損	-	42
投資有価証券評価損	-	29,999
特別損失合計	-	30,042
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	118,588	589,884
法人税、住民税及び事業税	7,750	93,371
法人税等合計	7,750	93,371
当期純利益又は当期純損失()	126,338	496,513
非支配株主に帰属する当期純損失()	23,100	25,746
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失()	103,238	522,259

【連結包括利益計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当期純利益又は当期純損失()	126,338	496,513
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	24,111	34,320
為替換算調整勘定	1,736	5,072
持分法適用会社に対する持分相当額	10,475	9,693
その他の包括利益合計	15,372	49,086
包括利益	110,966	545,599
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	87,866	571,346
非支配株主に係る包括利益	23,100	25,746

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,973,097	3,982,452	4,203,656	102	4,751,791
当期変動額					
剰余金の配当			-		-
親会社株主に帰属する当期純損失 （ ）			103,238		103,238
株主資本以外の項目の当期変動額 （純額）					
当期変動額合計	-	-	103,238	-	103,238
当期末残高	4,973,097	3,982,452	4,306,895	102	4,648,552

	その他の包括利益累計額			新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	その他の包括利 益累計額合計			
当期首残高	47,519	5,158	42,361	52,204	202,796	5,049,152
当期変動額						
剰余金の配当						-
親会社株主に帰属する当期純損失 （ ）						103,238
株主資本以外の項目の当期変動額 （純額）	24,111	10,369	13,741	-	6,900	20,641
当期変動額合計	24,111	10,369	13,741	-	6,900	82,597
当期末残高	71,630	15,527	56,102	52,204	209,696	4,966,555

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	4,973,097	3,982,452	4,306,895	102	4,648,552
当期変動額					
剰余金の配当			-		-
親会社株主に帰属する当期純利益			522,259		522,259
自己株式の取得				47	47
株主資本以外の項目の当期変動額 （純額）					
当期変動額合計	-	-	522,259	47	522,212
当期末残高	4,973,097	3,982,452	3,784,635	149	5,170,765

	その他の包括利益累計額			新株予約権	非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算調整勘 定	その他の包括利 益累計額合計			
当期首残高	71,630	15,527	56,102	52,204	209,696	4,966,555
当期変動額						
剰余金の配当						-
親会社株主に帰属する当期純利益						522,259
自己株式の取得						47
株主資本以外の項目の当期変動額 （純額）	34,320	16,397	50,717	9,364	25,746	15,606
当期変動額合計	34,320	16,397	50,717	9,364	25,746	537,818
当期末残高	105,950	869	106,819	42,840	183,949	5,504,374

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：千円)

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失()	118,588	589,884
減価償却費	172,383	177,929
のれん償却額	3,710	3,710
貸倒引当金の増減額(は減少)	593	813
受取利息及び受取配当金	21,925	25,245
支払利息	-	768
為替差損益(は益)	24,123	102,622
持分法による投資損益(は益)	8,303	10,185
新株予約権戻入益	-	9,364
投資事業組合運用損益(は益)	6,715	45,787
投資有価証券評価損益(は益)	-	29,999
売上債権の増減額(は増加)	156,161	153,051
たな卸資産の増減額(は増加)	24,025	12,027
前払費用の増減額(は増加)	34,208	25,030
その他	12,553	180,252
小計	58,108	874,092
利息及び配当金の受取額	21,694	21,873
利息の支払額	-	768
法人税等の支払額	10,058	29,899
法人税等の還付額	7,276	3,304
営業活動によるキャッシュ・フロー	39,196	868,602
投資活動によるキャッシュ・フロー		
定期預金の預入による支出	114,380	324,000
定期預金の払戻による収入	-	337,204
有形固定資産の取得による支出	28,613	5,250
無形固定資産の取得による支出	181,644	205,216
出資金の分配による収入	8,400	83,700
投資有価証券の取得による支出	238,980	-
敷金及び保証金の差入による支出	881	684
敷金及び保証金の回収による収入	1,601	259
その他	37,537	28,470
投資活動によるキャッシュ・フロー	592,036	142,457
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入れによる収入	-	50,000
短期借入金の返済による支出	-	16,665
長期借入れによる収入	-	150,000
非支配株主からの払込みによる収入	30,000	-
自己株式の増減額(は増加)	-	47
財務活動によるキャッシュ・フロー	30,000	183,287
現金及び現金同等物に係る換算差額	18,684	100,668
現金及び現金同等物の増減額(は減少)	619,917	808,763
現金及び現金同等物の期首残高	4,048,206	3,428,289
現金及び現金同等物の期末残高	3,428,289	4,237,053

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 4社
連結子会社名 AMIVOICE THAI CO.,LTD.
株式会社グラモ
株式会社速記センターつくば
Glamo America, Inc.

2. 持分法の適用に関する事項

- (1) 持分法適用の関連会社数 1社
関連会社名 True Voice Company Limited
- (2) 持分法適用会社True Voice Company Limitedの決算日は12月31日であり、連結財務諸表作成にあたっては当該会社の事業年度に係る財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた重要な取引については連結上必要な調整を行っております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度の末日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

有価証券

(イ) その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合への出資(金融商品取引法第2条第2項により有価証券とみなされるもの)については、組合規約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を「営業外損益」へ純額で取り込む方法によっております。

たな卸資産

(イ) 商品、製品及び原材料

移動平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(ロ) 仕掛品

個別法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

有形固定資産

定率法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 6～18年

その他(工具、器具及び備品) 2～18年

無形固定資産

ソフトウェア

自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間に基づく定額法によっております。

収益獲得目的のもの 3年

費用削減目的のもの 5年

市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売収益に基づく償却額と残存有効期間(3年)に基づく均等配分額のいずれか大きい額としております。

(3) 重要な引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率を勘案して必要額を、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案した回収不能見込額を計上しております。

(4) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(5) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金（現金及び現金同等物）は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(6) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式を採用しております。

（会計方針の変更）

該当事項はありません。

（未適用の会計基準等）

- ・「収益認識に関する会計基準」（企業会計基準第29号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）
- ・「収益認識に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第30号 平成30年3月30日 企業会計基準委員会）

(1) 概要

国際会計基準審議会（IASB）及び米国財務会計基準審議会（FASB）は、共同して収益認識に関する包括的な会計基準の開発を行い、平成26年5月に「顧客との契約から生じる収益」（IASBにおいてはIFRS第15号、FASBにおいてはTopic606）を公表しており、IFRS第15号は平成30年1月1日以降開始する事業年度から、Topic606は平成29年12月15日より後に開始する事業年度から適用される状況を踏まえ、企業会計基準委員会において、収益認識に関する包括的な会計基準が開発され、適用指針と合わせて公表されたものです。

企業会計基準委員会の収益認識に関する会計基準の開発にあたっての基本的な方針として、IFRS第15号と整合性を図る便益の1つである財務諸表間の比較可能性の観点から、IFRS第15号の基本的な原則を取り入れることを出発点とし、会計基準を定めることとされ、また、これまで我が国で行われてきた実務等に配慮すべき項目がある場合には、比較可能性を損なわせない範囲で代替的な取り扱いを追加することとされております。

(2) 適用予定日

平成34年3月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「収益認識に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中でありません。

(連結貸借対照表関係)
非連結子会社及び関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
投資有価証券(株式)	14,672千円	15,812千円

(連結損益計算書関係)

1 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
従業員給与手当	583,597千円	678,159千円
支払手数料	124,765	138,690
研究開発費	378,975	394,690

2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
	378,975千円	394,690千円

(連結包括利益計算書関係)

その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自平成28年4月1日 至平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自平成29年4月1日 至平成30年3月31日)
その他有価証券評価差額金:		
当期発生額	34,781千円	49,452千円
組替調整額	-	-
税効果調整前	34,781	49,452
税効果額	10,669	15,132
その他有価証券評価差額金	24,111	34,320
為替換算調整勘定:		
当期発生額	1,736	5,072
持分法適用会社に対する持分相当額:		
当期発生額	10,475	9,693
その他の包括利益合計	15,372	49,086

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数(株)	当連結会計年度 増加株式数(株)	当連結会計年度 減少株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
発行済株式				
普通株式	15,929,405	-	-	15,929,405
合計	15,929,405	-	-	15,929,405
自己株式				
普通株式	75	-	-	75
合計	75	-	-	75

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)				当連結会計 年度末残高 (千円)
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 (親会社)	第3回新株予約権 (第三者割当て)	普通株式	2,520,000	-	-	2,520,000	42,840
	ストック・オプションと しての新株予約権	-	-	-	-	-	9,364
合計		-	2,520,000	-	-	2,520,000	52,204

3. 配当に関する事項

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度 期首株式数（株）	当連結会計年度 増加株式数（株）	当連結会計年度 減少株式数（株）	当連結会計年度末 株式数（株）
発行済株式				
普通株式	15,929,405	-	-	15,929,405
合計	15,929,405	-	-	15,929,405
自己株式				
普通株式	75	25	-	100
合計	75	25	-	100

普通株式の自己株式の増加25株は、単元未満株式の買取によるものであります。

2. 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約 権の目的 となる株 式の種類	新株予約権の目的となる株式の数（株）				当連結会計 年度末残高 （千円）
			当連結会計 年度期首	当連結会計 年度増加	当連結会計 年度減少	当連結会計 年度末	
提出会社 （親会社）	第3回新株予約権 （第三者割当て）	普通株式	2,520,000	-	-	2,520,000	42,840
合計		-	2,520,000	-	-	2,520,000	42,840

3. 配当に関する事項

該当事項はありません。

（連結キャッシュ・フロー計算書関係）

現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 （自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）	当連結会計年度 （自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）
現金及び預金勘定	3,545,058千円	4,341,883千円
預入期間が3ヶ月を超える定期預金	116,769	104,830
現金及び現金同等物	3,428,289	4,237,053

（リース取引関係）

（借主側）

オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

（単位：千円）

	前連結会計年度 （平成29年3月31日）	当連結会計年度 （平成30年3月31日）
1年内	64,225	64,225
1年超	117,747	53,521
合計	181,973	117,747

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1)金融商品に対する取組方針

当社グループは、事業計画および研究開発計画に照らして、必要な資金を主に株式の発行により調達しております。一時的な余資については資産運用規程に従い、安定性を最優先に金融商品を選定し運用しております。

(2)金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形および売掛金は、取引先の信用リスクに晒されております。

有価証券、投資有価証券は、主に債券(米ドル建社債)、株式および投資事業有限責任組合への出資であります。これらは、金融商品市場における相場その他の指標等の変化によるリスクに晒されております。

営業債務である買掛金は、そのほとんどが3ヶ月以内の支払期日であります。

(3)金融商品に係るリスク管理体制

信用リスク(取引先の契約不履行等に係るリスク)の管理

当社は、与信管理規程に従い、営業債権について、経営管理部が主要な取引先の状況を定期的にモニタリングし、取引相手ごとに期日および残高を管理するとともに、財務状況等の悪化等による回収懸念の早期把握や軽減を図っております。連結子会社につきましても取引先は限られてはおりますが、当社の債権管理に準じて管理しております。

市場リスク(為替や金利等の変動リスク)の管理

当社は、外貨建ての営業債権債務について、通貨別月別の取引実績に対して為替の変動リスクを勘案し、為替予約取引等の取引を検討しております。

資金調達に係る流動性リスク(支払期日に支払いを実行できなくなるリスク)の管理

当社は、各部の事業計画および研究開発計画に基づき経営管理部が月毎に資金繰計画を作成・更新するとともに、手許流動性の維持などにより流動性リスクを管理しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。

前連結会計年度(平成29年3月31日)

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	3,545,058	3,545,058	-
(2) 受取手形及び売掛金	970,235	970,235	-
(3) 投資有価証券	622,126	622,126	-
(4) 敷金及び保証金	85,966	85,966	-
資産計	5,223,387	5,223,387	-
(1) 買掛金	135,192	135,192	-
(2) 未払金	72,481	72,481	-
(3) 社債	770,000	723,661	46,399
負債計	977,673	931,334	46,399

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (千円)	時価 (千円)	差額 (千円)
(1) 現金及び預金	4,341,883	4,341,883	-
(2) 受取手形及び売掛金	1,115,186	1,115,186	-
(3) 電子記録債権	18,525	18,525	-
(4) 投資有価証券	603,667	603,667	-
(5) 敷金及び保証金	86,556	86,556	-
資産計	6,165,818	6,165,818	-
(1) 買掛金	77,976	77,976	-
(2) 短期借入金	33,335	33,335	-
(3) 1年内返済予定の長期借入金	2,912	2,912	-
(4) 未払金	119,145	119,145	-
(5) 社債	770,000	722,515	47,484
(6) 長期借入金	147,088	140,085	7,002
負債計	1,150,457	1,095,970	54,487

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法並びに有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。なお、(2)受取手形及び売掛金は貸倒引当金控除後の金額を記載しております。

(4) 投資有価証券

時価について、株式は取引所の価格によっております。また、投資事業組合出資については、組合財産の持分相当額を組合出資の時価とみなして計上しております。

(5) 敷金及び保証金

これらの時価については、将来キャッシュ・フローを期末から返還までの見積り期間に基づき国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割り引いた現在価値により算定した結果、時価は帳簿価額と近似しているため、当該帳簿価額を時価としております。

負 債

(1) 買掛金、(2) 短期借入金、(3) 1年内返済予定の長期借入金、(4) 未払金

短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(5) 社債、(6) 長期借入金

社債の時価の算定は、その将来キャッシュ・フローを国債の利回り等適切な指標に信用スプレッドを上乗せした利率で割り引いた現在価値により算出しております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：千円)

区分	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
非上場株式	14,672	15,812

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	3,545,058	-	-	-
受取手形及び売掛金	970,235	-	-	-
電子記録債権	7,023	-	-	-
合計	4,522,317	-	-	-

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 5年以内 (千円)	5年超 10年以内 (千円)	10年超 (千円)
現金及び預金	4,341,883	-	-	-
受取手形及び売掛金	1,115,186	-	-	-
電子記録債権	18,525	-	-	-
合計	5,475,595	-	-	-

4. 借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	1年以内 (千円)	1年超 2年以内 (千円)	2年超 3年以内 (千円)	3年超 4年以内 (千円)	4年超 5年以内 (千円)	5年超 (千円)
短期借入金	33,335	-	-	-	-	-
長期借入金	2,912	4,992	4,992	4,992	4,992	127,120
合計	36,247	4,992	4,992	4,992	4,992	127,120

（有価証券関係）

1. その他有価証券

前連結会計年度（平成29年3月31日）

	種類	連結貸借対照表計上 額（千円）	取得原価（千円）	差額（千円）
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	113,883	29,920	83,963
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えない もの	(1) 株式	238,980	238,980	-
	(2) その他	269,263	300,000	30,736
合計		622,126	568,900	53,226

当連結会計年度（平成30年3月31日）

	種類	連結貸借対照表計上 額（千円）	取得原価（千円）	差額（千円）
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えるもの	(1) 株式	132,508	29,920	102,588
連結貸借対照表計上額 が取得原価を超えない もの	(1) 株式	212,540	208,980	3,560
	(2) その他	258,618	300,000	41,381
合計		603,667	538,900	64,767

2.売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
該当事項はありません。

3.減損処理を行った有価証券

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
当連結会計年度において、投資有価証券について29,999千円の減損処理を行っております。

(デリバティブ取引関係)

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
期末残高がないため、該当事項はありません。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
期末残高がないため、該当事項はありません。

(退職給付関係)

当社グループは退職給付制度がないため、該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
減価償却超過額	14,126千円	23,291千円
貸倒引当金繰入限度超過額	1,616	1,368
関係会社株式	121,923	128,774
繰越欠損金	1,197,535	541,133
その他	18,462	30,175
繰延税金資産小計	1,353,663	724,743
評価性引当額	1,353,663	724,743
繰延税金資産合計	-	-
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	31,622	46,754
繰延税金負債合計	31,622	46,754
繰延税金資産(負債)の純額	31,622	46,754

(注) 前連結会計年度及び当連結会計年度における繰延税金負債の純額は、連結貸借対照表の以下の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
流動負債 - 繰延税金負債	- 千円	- 千円
固定負債 - 繰延税金負債	31,622千円	46,754千円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成29年3月31日)	当連結会計年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	-	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	-	0.7%
住民税均等割	-	1.1%
評価性引当の増減	-	15.3%
試験研究費に係る税額控除	-	3.2%
その他	-	1.7%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	-	15.8%

(注) 前事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(資産除去債務関係)

資産除去債務のうち連結貸借対照表に計上しているもの

イ 当該資産除去債務の概要

本社事務所の不動産賃貸借契約に伴う原状回復義務等であります。

ロ 当該資産除去債務の金額の算定方法

使用見込期間を取得から15年と見積り、割引率は1.8%を使用して資産除去債務の金額を計算しております。

ハ 当該資産除去債務の総額の増減

	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
期首残高	7,411千円	7,545千円
有形固定資産の取得に伴う増加額	-	-
時の経過による調整額	134	136
資産除去債務の履行による減少額	-	-
その他増減額(は減少)	-	-
期末残高	7,545	7,682

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)及び当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

当社グループは、音声事業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1)売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2)有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)

1. 製品及びサービスごとの情報

単一の製品・サービスの区分の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1)売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2)有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	音声事業	全社・消去	合計
当期償却額	3,710	-	3,710
当期末残高	9,275	-	9,275

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

（単位：千円）

	音声事業	全社・消去	合計
当期償却額	3,710	-	3,710
当期末残高	5,565	-	5,565

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

種類	会社等の名称または氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（%）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
関連会社	True Voice Company Limited	Bangkok Thailand	24,000千タイバツ	音声事業	45.0	ソフトウェア・ライセンス等の販売	ソフトウェア・ライセンス等の販売	22,396	売掛金	17,924

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

種類	会社等の名称または氏名	所在地	資本金又は出資金	事業の内容又は職業	議決権等の所有（被所有）割合（%）	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額（千円）	科目	期末残高（千円）
関連会社	True Voice Company Limited	Bangkok Thailand	24,000千タイバツ	音声事業	45.0	ソフトウェア・ライセンス等の販売	ソフトウェア・ライセンス等の販売	81,669	売掛金	7,107

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針

1. 取引金額には消費税等は含まれておりません。
2. 上記取引製品の販売については、市場価格を参考に決定しております。

(イ) 連結財務諸表提出会社の重要な子会社の役員及びその近親者

前連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

前連結会計年度 (自 平成28年 4月 1日 至 平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年 4月 1日 至 平成30年 3月31日)
1株当たり純資産額 295円34銭	1株当たり純資産額 331円31銭
1株当たり当期純損失金額 6円48銭	1株当たり当期純利益金額 32円79銭
なお、潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。	潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額 31円49銭

(注) 1. 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (平成29年 3月31日)	当連結会計年度 (平成30年 3月31日)
純資産の部の合計額(千円)	4,966,555	5,504,374
純資産の部の合計額から控除する金額 (千円)	261,900	226,789
(うち新株予約権)(千円)	(52,204)	(42,840)
(うち非支配株主持分)(千円)	(209,696)	(183,949)
普通株式に係る期末の純資産額(千円)	4,704,655	5,277,585
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数(株)	15,929,330	15,929,305

(注) 2. 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額及び算定上の基礎並びに潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額及び算定上の基礎は、以下のとおりであります。

項目	前連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
(1) 親会社株主に帰属する当期純利益金額又は親会社株主に帰属する当期純損失金額()(千円)	103,238	522,259
(算定上の基礎)		
普通株主に帰属しない金額(千円)	-	-
普通株主に係る親会社株主に帰属する当期純利益金額又は親会社株主に帰属する当期純損失金額()(千円)	103,238	522,259
普通株式の期中平均株式数(株)	15,929,330	15,929,328
(2) 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額		
(算定上の基礎)		
親会社株主に帰属する当期純利益調整額(千円)	-	-
普通株式増加数(株)	-	658,119
(うち新株予約権(株))	-	(658,119)
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額の算定に含めなかった潜在株式の概要	第3回新株予約権(平成25年5月10日取締役会決議90個) 第1回無担保転換社債型新株予約権付社債(平成25年5月10日取締役会決議22個) 新株予約権(平成25年9月25日取締役会決議4,890個)	第3回新株予約権(平成25年5月10日取締役会決議90個)

(注) 前連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式は存在するものの1株当たり当期純損失金額であるため記載しておりません。

(重要な後発事象)

(新株予約権付社債にかかる新株予約権の行使)

当社が平成25年5月に発行した第1回無担保転換社債型新株予約権付社債は、当連結会計年度終了後、平成30年5月28日までに権利行使されています。その概要は次の通りであります。

- ・ 転換社債型新株予約権付社債の減少額 770,000千円
- ・ 資本金の増加額 385,000千円
- ・ 資本準備金の増加額 385,000千円
- ・ 増加した株式の種類及び株数 普通株式 658,119株

(新株予約権の行使)

当社が平成25年5月に発行した第3回新株予約権は、当連結会計年度終了後、平成30年6月27日までに権利行使されています。その概要は次の通りであります。

- ・ 新株予約権の減少額 25,228千円
- ・ 資本金の増加額 1,334,116千円
- ・ 資本準備金の増加額 1,332,632千円
- ・ 行使された新株予約権の個数 53個
- ・ 増加した株式の種類及び株数 普通株式 1,484,000株

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	利率(%)	担保	償還期限
(株)アドバンスト・メディア	第1回無担保転換社債型新株予約権付社債	平成年月日 25.5.27	770,000	770,000	0.0	なし	平成年月日 31.5.27

(注) 1. 新株予約権付社債に関する記載は次のとおりであります。

銘柄	第1回無担保転換社債型新株予約権付社債
発行すべき株式	普通株式
新株予約権の発行価額(円)	無償
株式の発行価格(円)	1,170
発行価額の総額(千円)	1,505,000
新株予約権の行使により発行した株式の発行価額の総額(円)	735,000
新株予約権の付与割合(%)	100
新株予約権の行使期間	自平成25年5月27日 至平成31年5月26日

2. 連結決算日後5年間の償還予定額は以下のとおりであります。

1年以内 (千円)	1年超2年 以内 (千円)	2年超3年 以内 (千円)	3年超4年 以内 (千円)	4年超5年 以内 (千円)
-	770,000	-	-	-

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (千円)	当期末残高 (千円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	-	33,335	0.95	-
1年以内に返済予定の長期借入金	-	2,912	1.21	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く)	-	147,088	0.55	平成31年~36年
其他有利子負債	-	-	-	-
合計	-	183,335	-	-

(注) 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

(長期借入金の有利子負債の連結決算日後の返済予定額)

当該情報は、「第5 経理の状況 1.連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 連結財務諸表注記 (金融商品関係) 4.借入金の連結決算日後の返済予定額」に記載しております。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(千円)	532,451	1,424,788	2,248,411	3,683,329
税金等調整前四半期(当期)純利益金額又は税金等調整前四半期純損失金額()(千円)	103,056	133,003	211,413	589,884
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益又は親会社株主に帰属する四半期純損失()(千円)	97,103	122,886	195,753	522,259
1株当たり四半期(当期)純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額()(円)	6.10	7.71	12.29	32.79

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額()(円)	6.10	13.81	4.57	20.50

2【財務諸表等】

(1)【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：千円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	3,335,566	4,017,048
受取手形	11,615	4,844
売掛金	850,435	930,877
電子記録債権	7,023	18,525
商品及び製品	26,090	28,349
仕掛品	1,841	8,440
原材料及び貯蔵品	10,264	17,488
前払費用	70,941	89,200
未収入金	6,114	2,075
その他	4,048	6,245
貸倒引当金	5,230	4,434
流動資産合計	4,318,710	5,118,661
固定資産		
有形固定資産		
建物	7,091	6,602
工具、器具及び備品	38,557	40,943
有形固定資産合計	45,649	47,545
無形固定資産		
ソフトウェア	227,251	263,070
ソフトウェア仮勘定	32,556	42,779
無形固定資産合計	259,807	305,849
投資その他の資産		
投資有価証券	622,126	603,667
関係会社株式	168,583	146,471
敷金及び保証金	84,705	84,778
長期前払費用	328,930	282,587
その他	124,777	152,933
投資その他の資産合計	1,329,124	1,270,437
固定資産合計	1,634,581	1,623,833
資産合計	5,953,291	6,742,495

(単位：千円)

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	112,499	67,929
未払金	60,706	85,376
未払費用	16,757	40,511
未払法人税等	28,439	122,787
前受金	124,086	171,510
預り金	6,637	17,510
その他	29,072	76,007
流動負債合計	378,199	581,633
固定負債		
社債	770,000	770,000
資産除去債務	7,545	7,682
繰延税金負債	31,622	46,754
固定負債合計	809,167	824,436
負債合計	1,187,366	1,406,070
純資産の部		
株主資本		
資本金	4,973,097	4,973,097
資本剰余金		
資本準備金	3,439,797	3,439,797
資本剰余金合計	3,439,797	3,439,797
利益剰余金		
その他利益剰余金		
繰越利益剰余金	3,770,702	3,225,111
利益剰余金合計	3,770,702	3,225,111
自己株式	102	149
株主資本合計	4,642,090	5,187,634
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	71,630	105,950
評価・換算差額等合計	71,630	105,950
新株予約権	52,204	42,840
純資産合計	4,765,924	5,336,424
負債純資産合計	5,953,291	6,742,495

【損益計算書】

(単位：千円)

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
売上高	2,286,405	2,304,387
売上原価	2,797,086	2,773,619
売上総利益	1,489,318	2,273,767
販売費及び一般管理費	1,214,976	1,215,781
営業利益又は営業損失()	8,332	695,589
営業外収益		
受取利息	21,803	25,121
投資事業組合運用益	-	45,787
雑収入	2,12,771	2,17,088
営業外収益合計	34,574	87,998
営業外費用		
支払手数料	450	-
投資事業組合運用損	6,715	-
為替差損	42,349	105,159
雑損失	7,678	-
営業外費用合計	57,194	105,159
経常利益又は経常損失()	30,951	678,428
特別利益		
新株予約権戻入益	-	9,364
特別利益合計	-	9,364
特別損失		
固定資産除却損	-	42
投資有価証券評価損	-	29,999
関係会社株式評価損	-	22,111
ソフトウェア除却損	-	801
特別損失合計	-	52,955
税引前当期純利益又は税引前当期純損失()	30,951	634,836
法人税、住民税及び事業税	5,810	89,245
法人税等合計	5,810	89,245
当期純利益又は当期純損失()	36,761	545,591

【売上原価明細書】

区分	注記 番号	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)		当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)	
		金額(千円)	構成比 (%)	金額(千円)	構成比 (%)
1. 期首商品たな卸高			16,248		26,090
2. 当期商品仕入高			110,908		93,742
3. 当期製品製造原価					
材料費		126,337	18.3	119,221	17.4
労務費		107,421	15.6	101,542	14.8
経費	1	456,052	66.1	466,307	67.9
当期総製造費用		689,810	100.0	687,071	100.0
期首仕掛品たな卸高		8,010		1,841	
計		697,820		688,913	
期末仕掛品たな卸高		1,841	695,980	8,440	680,472
4. 期末商品たな卸高			26,090		28,349
5. 商品評価損			39		1,664
当期売上原価			797,086		773,619

(注) 1 主な内訳は、次のとおりであります。

項目	前事業年度(千円)	当事業年度(千円)
	(自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	(自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
外注加工費	232,415	193,789
ソフトウェア償却費	126,419	150,552
ロイヤリティ	42,086	42,086

(原価計算の方法)

当社の原価計算は、実際原価による個別原価計算を採用しております。

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：千円）

	株主資本						株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	4,973,097	3,439,797	3,439,797	3,733,941	3,733,941	102	4,678,851
当期変動額							
当期純損失（ ）				36,761	36,761		36,761
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）							
当期変動額合計	-	-	-	36,761	36,761		36,761
当期末残高	4,973,097	3,439,797	3,439,797	3,770,702	3,770,702	102	4,642,090

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	47,519	47,519	52,204	4,778,575
当期変動額				
当期純損失（ ）				36,761
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	24,111	24,111	-	24,111
当期変動額合計	24,111	24,111	-	12,650
当期末残高	71,630	71,630	52,204	4,765,924

当事業年度（自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日）

(単位：千円)

	株主資本						株主資本合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金		自己株式	
		資本準備金	資本剰余金合計	その他利益剰余金 繰越利益剰余金	利益剰余金合計		
当期首残高	4,973,097	3,439,797	3,439,797	3,770,702	3,770,702	102	4,642,090
当期変動額							
当期純利益				545,591	545,591		545,591
自己株式の取得						47	47
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）							-
当期変動額合計	-	-	-	545,591	545,591	47	545,544
当期末残高	4,973,097	3,439,797	3,439,797	3,225,111	3,225,111	149	5,187,634

	評価・換算差額等		新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	71,630	71,630	52,204	4,765,924
当期変動額				
当期純利益				545,591
自己株式の取得				47
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	34,320	34,320	9,364	24,956
当期変動額合計	34,320	34,320	9,364	570,500
当期末残高	105,950	105,950	42,840	5,336,424

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(重要な会計方針)

1 資産の評価基準及び評価方法

(1) 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

その他有価証券

時価のあるもの

決算日の市場価格等に基づく時価法 (評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

なお、投資事業有限責任組合への出資 (金融商品取引法第 2 条第 2 項により有価証券とみなされるもの) については、組合規約に規定される決算報告日に応じて入手可能な最近の決算書を基礎とし、持分相当額を「営業外損益」へ純額で取り込む方法によっております。

(2) たな卸資産の評価基準及び評価方法

商品及び原材料

移動平均法による原価法 (貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

仕掛品

個別法による原価法 (貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

2 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産

定率法を採用しております。

なお、主な耐用年数は以下のとおりであります。

建物 6 ~ 18年

工具、器具及び備品 2 ~ 18年

(2) 無形固定資産

ソフトウェア

自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間に基づく定額法によっております。

収益獲得目的のもの 3年

費用削減目的のもの 5年

市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売収益に基づく償却額と残存有効期間 3 年に基づく均等配分額のいずれか大きい額としております。

3 引当金の計上基準

貸倒引当金

債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率を勘案して必要額を、貸倒懸念債権及び破産更生債権については個別に回収可能性を勘案した回収不能見込額を計上しております。

4 その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式を採用しております。

(会計方針の変更)
該当事項はありません。

(貸借対照表関係)
関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
短期金銭債権	7,871千円	10,197千円
短期金銭債務	6,778千円	1,788千円

(損益計算書関係)

- 1 販売費及び一般管理費のうち販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度3%、当事業年度3%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度97%、当事業年度97%であります。

なお、主要な費目及び金額は次のとおりです。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
従業員給与	663,229千円	726,816千円
支払手数料	155,990	170,781
研究開発費	293,001	244,640
減価償却費	20,909	21,004
貸倒引当金繰入額	591	173

- 2 関係会社との取引に係るものが次のとおり含まれております。

	前事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)	当事業年度 (自 平成29年4月1日 至 平成30年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	6,886千円	13,056千円
売上原価	21,610	13,250
販売費及び一般管理費	205	303
営業取引以外の取引による取引高	10,482	10,198

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式(当事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式130,459千円、関連会社株式16,012千円、前事業年度の貸借対照表計上額は子会社株式130,459千円、関連会社株式38,124千円)は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
繰延税金資産		
減価償却超過額	11,331千円	10,134千円
関係会社株式	121,923	128,774
貸倒引当金繰入限度超過額	1,616	1,368
資産除去債務	2,308	2,352
繰越欠損金	1,090,191	440,864
その他	7,958	17,411
繰延税金資産小計	1,235,329	600,906
評価性引当額	1,235,329	600,906
繰延税金資産合計	-	-
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額金	31,622	46,754
繰延税金負債合計	31,622	46,754
繰延税金負債の純額	31,622	46,754

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成29年3月31日)	当事業年度 (平成30年3月31日)
法定実効税率	-	30.9%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	-	0.6%
住民税均等割	-	1.0%
評価性引当の増減	-	16.1%
試験研究費に係る税額控除	-	3.0%
その他	-	0.7%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	-	14.1%

(注) 前事業年度は、税引前当期純損失を計上しているため、記載を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

(新株予約権付社債にかかる新株予約権の行使)

当社が平成25年5月に発行した第1回無担保転換社債型新株予約権付社債は、当連結会計年度終了後、平成30年5月28日までに権利行使されています。その概要は次の通りであります。

・転換社債型新株予約権付社債の減少額	770,000千円
・資本金の増加額	385,000千円
・資本準備金の増加額	385,000千円
・増加した株式の種類及び株数	普通株式 658,119株

(新株予約権の行使)

当社が平成25年5月に発行した第3回新株予約権は、当連結会計年度終了後、平成30年6月27日までに権利行使されています。その概要は次の通りであります。

・新株予約権の減少額	25,228千円
・資本金の増加額	1,334,116千円
・資本準備金の増加額	1,332,632千円
・行使された新株予約権の個数	53個
・増加した株式の種類及び株数	普通株式 1,484,000株

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：千円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	78,596	555	-	1,044	79,151	72,549
	工具、器具及び備品	162,514	17,109	11,959	14,231	167,664	126,721
	計	241,111	17,665	11,959	15,276	246,816	199,271
無形固定資産	ソフトウェア	1,726,151	192,545	4,510	152,215	1,914,187	1,651,116
	ソフトウェア仮勘定	32,556	146,988	136,766	-	42,779	-
	計	1,758,708	339,534	141,276	152,215	1,956,966	1,651,116

- (注) 1. 「工具、器具及び備品」の「当期増減額」はサーバーの購入等によるものであります。
2. 「ソフトウェア」の「当期増加額」は主に販売用ソフトウェアの増加によるものであります。
3. 当期首残高及び当期末残高は取得価格により記載しております。

【引当金明細表】

(単位：千円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	5,230	4,434	5,230	4,434

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
株式の名義書換	-
公告掲載方法	<p>当会社の公告方法は、電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由により電子公告による公告ができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。</p> <p>なお、電子公告は当会社のホームページに掲載しており、そのアドレスは次のとおりです。</p> <p>http://www.advanced-media.co.jp/ir/index.html</p>
株主に対する特典	該当事項はありません。

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社には親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第20期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）平成29年6月30日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

平成29年6月30日関東財務局長に提出

(3) 有価証券報告書の訂正報告書

平成29年7月21日関東財務局長に提出

事業年度（第20期）（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）の有価証券報告書に係る訂正報告書及びその確認書であります。

(4) 四半期報告書及び確認書

（第21期第1四半期）（自 平成29年4月1日 至 平成29年6月30日）平成29年8月10日関東財務局長に提出

（第21期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日）平成29年11月10日関東財務局長に提出

（第21期第3四半期）（自 平成29年10月1日 至 平成29年12月31日）平成30年2月13日関東財務局長に提出

(5) 四半期報告書の訂正報告書

平成30年2月13日関東財務局長に提出

四半期会計期間（第21期第2四半期）（自 平成29年7月1日 至 平成29年9月30日）の四半期報告書に係る訂正報告書及びその確認書であります。

(6) 臨時報告書

平成29年7月3日関東財務局長に提出

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）に基づく臨時報告書であります。

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成30年6月28日

株式会社アドバンスト・メディア

取締役会 御中

監査法人アヴァンティア

代表社員
業務執行社員 公認会計士 小笠原 直 印

代表社員
業務執行社員 公認会計士 木村 直人 印

< 財務諸表監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アドバンスト・メディアの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め、全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アドバンスト・メディア及び連結子会社の平成30年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

< 内部統制監査 >

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社アドバンスト・メディアの平成30年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社アドバンスト・メディアが平成30年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
 2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。

独立監査人の監査報告書

平成30年6月28日

株式会社アドバンスト・メディア

取締役会 御中

監査法人アヴァンティア

代表社員 公認会計士 小笠原 直 印
業務執行社員

代表社員 公認会計士 木村 直人 印
業務執行社員

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社アドバンスト・メディアの平成29年4月1日から平成30年3月31日までの第21期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め、全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社アドバンスト・メディアの平成30年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
1. 上記は、監査報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社が別途保管しております。
 2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。